HP Anywhere

Windows

ソフトウェアバージョン: 10.10

管理者ガイド

ドキュメントリリース日 : 2013年11月（英語版）

ソフトウェアリリース日 : 2013年11月（英語版）

ご注意

保証

HP製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載は、追加保証を提供するものではありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HPはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HPからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211および12.212の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2012 - 2013 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標について

Adobe®は、Adobe Systems Incorporated (アドビシステムズ社) の登録商標です。

Microsoft®およびWindows®は、米国におけるMicrosoft Corporationの登録商標です。

OracleとJavaは、Oracle Corporationおよびその関連会社の登録商標です。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョンの番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

更新状況、およびご使用のドキュメントが最新版かどうかは、次のサイトで確認できます。

http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals

このサイトを利用するには、HP Passportへの登録とサインインが必要です。HP Passport IDの登録は、次のWebサイトから行なうことができます。

http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html

または、HP Passportのログインページの [**New users - please register**] リンクをクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPの営業担当にお問い合わせください。

サポート

HPソフトウェアサポートオンラインWebサイトを参照してください。

http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport

このサイトでは、HPのお客様窓口のほか、HPソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HPソフトウェアオンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様のビジネスを管理するのに必要な対話型の技術サポートツールに、素早く効率的にアクセスできます。HPソフトウェアサポートのWebサイトでは、次のようなことができます。

- 関心のあるナレッジドキュメントの検索
- サポートケースの登録とエンハンスメント要求のトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HPサポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェアカスタマーとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

一部のサポートを除き、サポートのご利用には、HP Passportユーザーとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport IDを登録するには、次のWebサイトにアクセスしてください。

http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html

アクセスレベルの詳細については、次のWebサイトをご覧ください。

http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp

目次

管理者ガイド 1

目次 6

概要 8

HP Anywhereのアーキテクチャー 9

SiteMinderを使用したHP Anywhereのログインセキュリティ 10

HP Anywhere用のLDAP構成の前提条件 12

HP AnywhereのLDAP管理者ユーザー 12

HP AnywhereのLDAPグループ 12

管理者コンソールの概要 15

管理者コンソールへのログインおよびログアウト 15

管理者コンソールのユーザーインターフェイス 16

一般設定 18

カタログ - 管理者が認識しておく必要がある事項 39

HP Web Servicesカタログ 40

HP Web Servicesカタログ内のアプリ - 開発者からエンドユーザーまで 41

HP Web Servicesカタログ使用時の前提条件 43

ステップ1: エンタープライズポータルとの統合に必要な情報の収集 43

ステップ2: エンタープライズポータルとの統合を要請する電子メールの送信 45

ステップ3: ディレクトリサービスグループの作成と同期 46

ステップ4: 3名のエンタープライズポータルユーザーの準備が整ったことを伝える確認の受信 47

ステップ5: HP Anywhere管理者コンソールでのHP Web Servicesカタログの設定 47

HP AnywhereによるHP Web Servicesカタログとユーザーの同期方法 48

アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ 49

HP Web ServicesカタログのSAML証明書の作成 57

HP Web Servicesカタログ内のアプリバージョンのアップグレード 58

エンドユーザーのHP Web Servicesカタログからのアプリの削除 60

付録A: HP Web Servicesカタログ内のアプリの命名規則 61

既定のカタログ 62

既定のカタログ内のアプリ - 開発者からエンドユーザーまで 63
既定のカタログへのアプリのアップロード 65
既定のカタログ内のアプリバージョンのアップグレード 67
LDAP承認グループとアプリの関連付け 67
エンドユーザーに対するアプリの有効化 68
グローバル設定とアプリ固有の設定の定義 70
アプリのデータソースの定義 71
アクティビティの表示設定 73
オフラインサポートの有効化 74
HP Anywhereからの電子メールの送信 76
電子メールの必須設定 76
電子メールのオプション設定 79
電子メールロゴの構成 81
電子メール形式のカスタマイズ 81
ロードバランサーとリバースプロキシの構成 82
AJPプロトコル用のjvmRoute構成の例 84
HP Anywhereユーザーインターフェイスのカスタマイズ 85
ブランド設定 87
独自のログイン画面の作成 89
ユーザーとデバイスの管理 - ユーザー/デバイス接続の制限 (ブラック/ホワイトリスト) 90
プロビジョンリストAPI 91
HTTPメソッド 91
Cassandra—バックアップおよび復元 95
Cassandraのバックアップツール 95
増分バックアップ 96
Cassandraの復旧プロセス 96

第1章

概要

本ガイドは、HP Anywhere管理者を対象にしています。

HP Anywhereは企業アプリケーションの開発、管理、消費のための革新的なアプローチを導入する、次世代のモバイルプラットフォームです。デスクトップ、タブレット、スマートフォンといったさまざまな種類のメディアでアクセスできる細分化されたアプリケーション(アプリ)を開発できるように設計されています。これにより、エンドユーザーは、どこにいても自分に必要な情報だけを消費できます。

さらに、HP Anywhereでは、構造化されたプロセスと構造化されていない議論を、組織化されたコンテキスト固有のアクティビティストリームに統合することで、共同作業に基づくワークフローの成功を支援しています。

管理者コンソールを使用して、組織のアプリを管理し、ほとんどの管理者タスクを実行します。

本ガイドでは、管理者コンソールとアプリの管理に必要なタスク、HP Anywhereプラットフォームのバックエンド、およびHP Anywhereのエンドユーザーについて説明します。

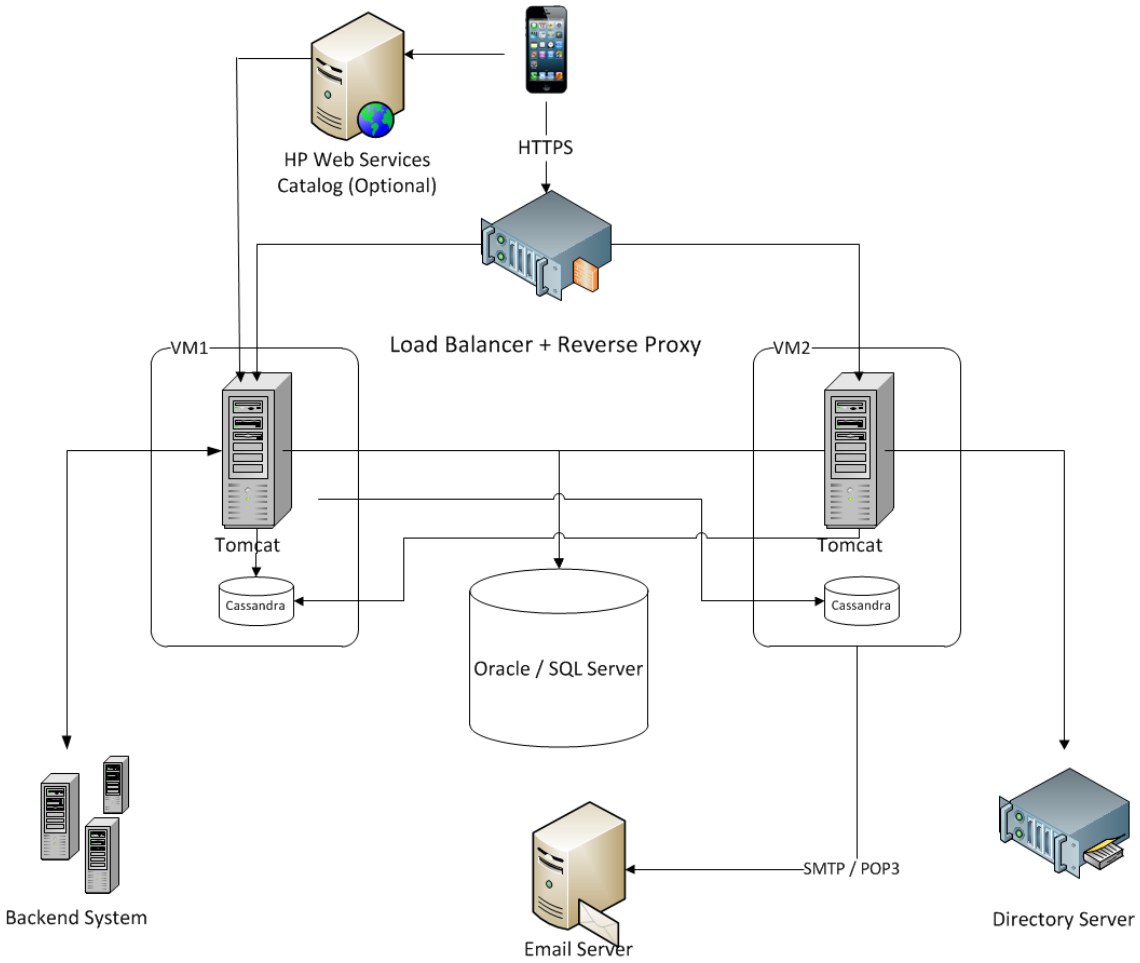
ユーザーやデバイスのホワイトリストまたはブラックリストの定義に関する詳細は、HP Software Product Manuals Webサイトの『HP Anywhere – Restricting User/Device Connections (Black/White List)』を参照してください。

HP Anywhereのアーキテクチャー

HP Anywhereのアーキテクチャーは以下から構成されています。

- **アプリ**:
  - **クライアント側**: エンドユーザーのスマートフォン、タブレット、またはデスクトップ上に表示されるインターフェイス。
  - **サーバー側**: クライアントデバイスとバックエンド間でプロキシとして機能するインターフェイス。
- **HP Anywhereランタイムサーバー - Tomcat**: アプリに接続するためのプラットフォーム。
- **バックエンドシステム**: エンタープライズシステム内のアプリのデータソース (HP Anywhereには付属していません)。
- **Cassandra Database**: 極めて拡張性が高く、分散型で、構造化されたストアで、キー/値のペアを格納します。HP Anywhereは、このストアを高速の分散キャッシングレイヤーとして使用します。
- **電子メールサーバー**: タイムラインからの電子メールの送受信用のインターフェイス (HP Anywhereには付属していません)。
- **ロードバランサーとリバースプロキシ**: 高可用性環境でHP Anywhereランタイムサーバー間の負荷を分散し、クラッシュ時のフェールオーバーを提供するために使用されます (オプションのコンポーネントで、HP Anywhereには付属していません)。
- **ディレクトリサーバー**: 組織のユーザーを格納します (HP Anywhereには付属していません)。
- **Oracle/SQLサーバー**: HP Anywhereサービスデータを格納します (HP Anywhereには付属していません)。
- **カタログ**: エンタープライズが使用するクライアント側アプリを格納します。開発者がアプリを管理者に提供し、管理者はそれらを関連するカタログにアップロードします。アプリは、自動的にカタログからHP Anywhereランタイムサーバーに転送されます。

次の図は、HP Anywhereのアーキテクチャーとフローの概要を示しています。

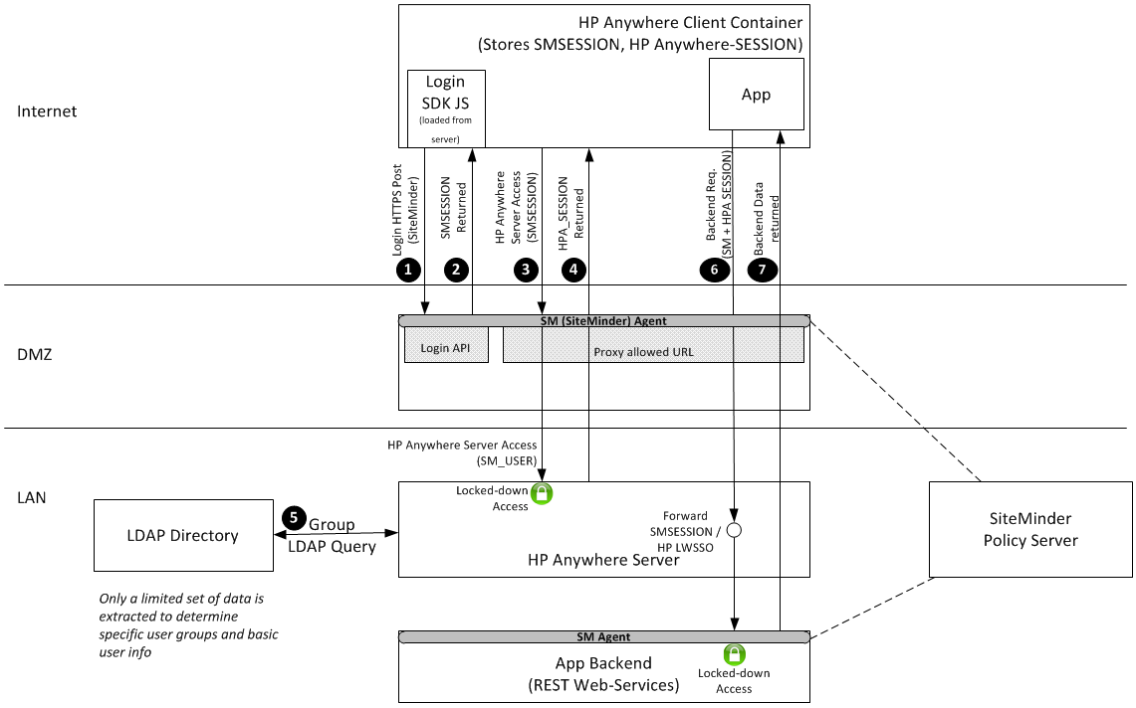


SiteMinderを使用したHP Anywhereのログインセキュリティ

HP Anywhereクライアントコンテナーには、次のものが含まれています。

- HP Anywhereの画面とクライアント側ロジック。
- 動的にロードされるアプリ。
- JavaScriptベースのログインページとログインフローを開始するためのHTTPS POST要求を作成するロジック。このライブラリは、公開URLから動的にロードされます。

Security Design



フロー:

❶クライアント側のJavaScriptが、HTTPS POSTを使用するログイン要求で、SiteMinder (またはその他の認証プロバイダー) に接続します。

❷SiteMinderは、ログインが成功すると、SMSESSIONトークンを使用して応答します。これ以降トークンの有効期限が切れるまで、サーバーへのすべての要求でSMSESSIONトークンが送信されます。

❸クライアントがSMSESSIONトークンを含むログイン要求を使用して、HP Anywhereサーバーに接続します。この要求は、HP Anywhereとの認証のためにこのトークンをDMZに渡します。HP Anywhereへのログオンが許可される公開URLの1つに要求が送信されます。

❹HP Anywhereが、後続の任意の要求で使用されるHPA_SESSIONトークンとともに、応答をクライアントに送信します。

❺HP Anywhereがエンタープライズユーザーリポジトリ (図のLDAP) に接続し、基本的なユーザー情報とユーザーが属するLDAPグループを要求します。この情報は、認証のために後でサーバー側で使用されます。

❻アプリのクライアント側が、2つのトークンを使用してサーバー側に接続します。これは、HP Anywhereクライアントコンテナーがこれらのヘッダーをすべての要求に追加するためです。アプリのサーバー側がバックエンドに接続し、SMSESSION (バックエンドがHPソフトウェア製品の場合は、HP-LWSSO) を転送します。

❼バックエンドからのレスポンスがアプリのクライアント側に返されます。

第2章

HP Anywhere用のLDAP構成の前提条件

HP Anywhereは、LDAPを介してユーザーと対話します。このため、HP Anywhere管理者コンソールで作業を開始する前に、管理者特権を少なくとも1人のLDAPユーザーに割り当てる必要があります。組織内のHP Anywhereユーザーが、関連するLDAPグループに割り当てられていることを確認する必要もあります。

詳細については、以下を参照してください。

- 「HP AnywhereのLDAP管理者ユーザー」(12ページ)
- 「HP AnywhereのLDAPグループ」(12ページ)

HP AnywhereのLDAP管理者ユーザー

管理者コンソールにログインする前に、管理者特権を少なくとも1人のLDAPユーザーに割り当てる必要があります。必要な数の管理者を作成することができます。

管理者特権をLDAPユーザーに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. コマンドラインインターフェイスを開き、次のコマンドを実行します。

   <HP Anywhereインストールフォルダー>\conf\population>assign-admin-role.bat <ユーザー名>

   例:

   C:\HP\HPAnywhere\conf\population>assign-admin-role.bat alex@mycompany.com

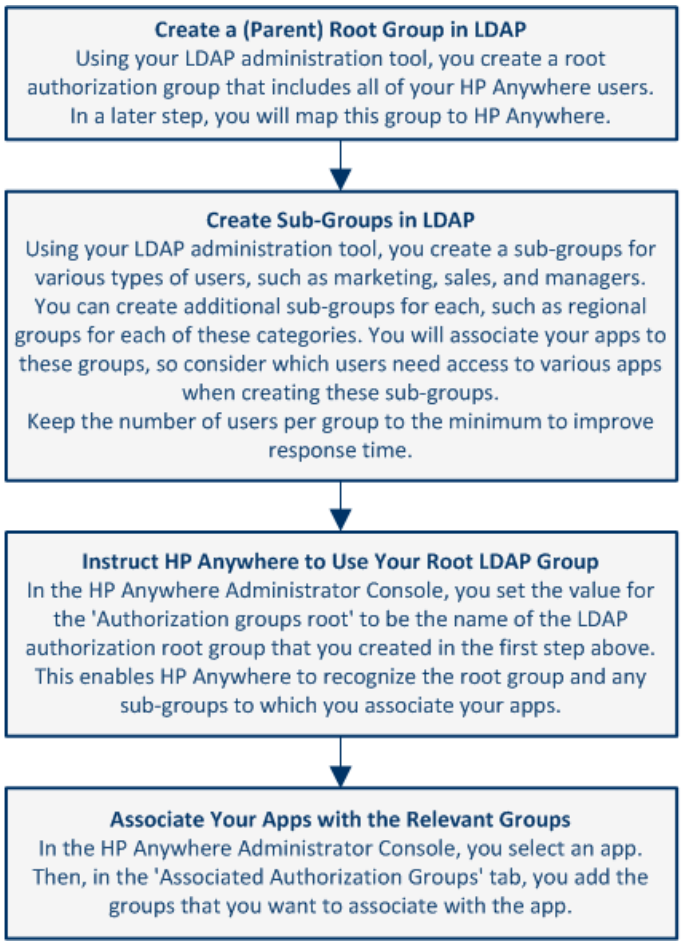
2. 管理者特権が必要な各LDAPユーザーについて繰り返します。

HP AnywhereのLDAPグループ

組織内のLDAPユーザーは、HP Anywhereにログインすることができます。ただし、アプリを表示してアクセスできるのは、承認されたLDAPユーザーのみです。ユーザーがカタログ内の関連するアプリを表示してアクセスできるようにするには、各アプリを専用のLDAPグループに関連付け、そのグループにユーザーを割り当てる必要があります。

LDAPグループは階層的に構成されるため、ユーザーは、割り当てられたLDAPグループまたは親のLDAPグループに関連付けられている任意のアプリにアクセスできます。たとえば、すべての営業担当者を対象に親のLDAPグループを作成し、さまざまな地域を対象にサブグループを作成するとします。特定の地域を対象としたLDAPグループにアプリを関連付けた場合は、その地域のグループのユーザーのみがアプリにアクセスできます。一方、同じアプリを親グループ(すべての営業担当者が対象)に関連付けた場合は、すべての地域のユーザーがアプリにアクセスできます。

次の図は、HP AnywhereアプリとLDAPグループの関連付けに必要なステップを示しています。



注: 本項では、LDAPのルート承認グループをHP Anywhereにマッピングする方法について説明します。アプリとLDAP承認グループのマッピングの詳細については、「LDAP承認グループとアプリの関連付け」(67ページ)を参照してください。

LDAPのルート承認グループをHP Anywhereにマッピングするには、次の手順を実行します。

1. LDAP管理ツールで、ルート承認グループを定義します。このグループが、すべてのHP Anywhereユーザーを対象としたルートLDAP承認グループです。

2. LDAP管理ツールで、各アプリに関連付ける特定のLDAPユーザーを含むサブグループを別途作成します。たとえば経費報告書アプリの場合は、マネージャー、営業担当者、技術者などを対象とした地域固有のサブグループを別々に作成します。

   注: 多数のユーザーを含む少数のグループを作成するより、少数のユーザーを含むグループを多数作成する方が賢明です。

3. HP Anywhere管理者コンソールで、次の操作を行います。
   (管理者コンソールを開く方法の詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参

照してください。)

a. Select **[設定] > [一般設定]** を選択します。

b. [Authorization] セクションで、[**Authorization groups root**] テキストボックスにグループ名を入力します。グループ名は大文字と小文字で区別されます。LDAPのフルパスではなく、CN値を使用してください。たとえばグループのLDAPパスがcn=hpanywhere, ou=Groups, dc=mycompany, dc=comの場合、hpanywhereという値のみ入力します。

注: ルートノードから最も遠いサブノード (leaf) までの想定されるパスの長さが10を超える場合、[**Authorization groups tree max height**] テキストボックス ([Authorization] セクション内) でその値を変更する必要があります。

第3章

管理者コンソールの概要

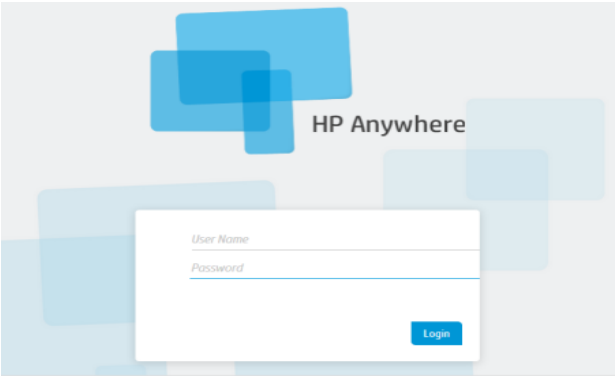
管理者コンソールを使用すると、次のことができます。

- 以下を含む、アプリの管理と構成
  - アプリのHP Anywhereサーバーへのインストール
  - アプリの表示と有効化
  - アプリと許可されるLDAPグループとの関連付け
  - アプリのバックエンドデータソースの構成
- システム設定の構成
- エンドユーザー向けHP Anywhereクライアントアプリの見た目と操作感のカスタマイズ
- 現在HP Anywhereにログインしているエンドユーザーに関連付けられているデバイスの表示

管理者コンソールへのログインおよびログアウト

管理者コンソールにログインするには、次の手順を実行します。

1. **http(s)://<ホスト名>:<ポート>/admin/**を参照します。ログインページが開きます。



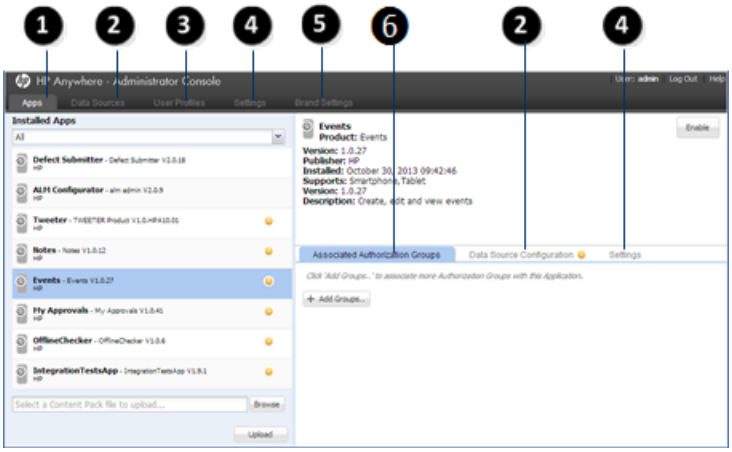
2. 管理者ログイン資格情報 (ユーザー名とパスワード) を入力し、[**Login**] をクリックします。ログインが認証されると、管理者コンソールが開きます。

管理者コンソールからログアウトするには、次の手順を実行します。

管理者コンソールの右上隅にある [**Log Out**] をクリックします。

管理者コンソールのユーザーインターフェイス

管理者コンソールを使用して、さまざまなHP Anywhereコンポーネントを管理します。本項では、管理者コンソールのユーザーインターフェイスの概要について説明します。



1	**Apps**	• インストール済みアプリの一覧を表示およびフィルターします • 新しいアプリをアップロードし、以前のバージョンのインストール済みアプリを上書きします • 右側のペインに選択したアプリの詳細を表示します • アプリのLDAPグループ関連付け、データソース、および設定を管理します 詳細については、「既定のカタログへのアプリのアップロード」(65ページ)を参照してください。
2	**Data Sources / Data Source Configuration**	選択したアプリのデータソースを表示および管理します 詳細については、「アプリのデータソースの定義」(71ページ)を参照してください。
3	**User Profiles**	HP Anywhereにログインしているユーザーとそのデバイスの一覧を表示およびフィルターします

❹	**Settings**	以下の設定を表示および構成します • アプリ固有の設定 • グローバルなシステム設定 詳細については、「グローバル設定とアプリ固有の設定の定義」(70ページ)を参照してください。
❺	**Brand Settings**	エンドユーザー向けHP Anywhereクライアントアプリのテーマカラーとロゴをカスタマイズします。
❻	**Associated Authorization Groups**	各アプリに関連付けられているLDAP承認グループを表示および管理します。 詳細については、「HP AnywhereのLDAPグループ」(12ページ)を参照してください。

一般設定

本項では、管理者コンソールの [General Settings] ペイン ([Settings] タブ) にある多くのフィールドについて説明します。

管理者コンソールを開く方法の詳細については、「管理者コンソールへのログインおよびログアウト」(15ページ)を参照してください。

一般テキストフィールドの制限

フィールド	説明
短いテキストの最大フィールド長	短いテキストフィールドで許可される最大文字数。 **必須:** はい **可能な値:** 1～4000の整数 **既定:** 100
長いテキストの最大フィールド長	長いテキストフィールドで許可される最大文字数。 **必須:** はい **可能な値:** 1～4000の整数 **既定:** 2000
中程度のテキストの最大フィールド長	中程度のテキストフィールドで許可される最大文字数。 **必須:** はい **可能な値:** 1～4000の整数 **既定:** 500

電子メール

フィールド	説明
電子メール同士の区切り文字 (完全一致)	電子メールスレッド同士の区切り文字。 **既定:** \r\n-----Original Message-----;\r\nFrom;\r\nSent from my;\r\n_____

電子メール (続き)

フィールド	説明
電子メール件名のプレフィックス	電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** HPA **例:** **差出人:** myserver@mycompany.com **日付:** 2013/9/15 (木) 12:57 PM **宛先:** Lee.Johnson@mycompany.com **件名: HPA:** 重要なアクティビティ
電子メールのトークン有効期間 (時間)	ユーザーが電子メールに返信可能な期間 (時間)。この時間が経過すると、トークンの有効期限が切れ、電子メールの返信が受け付けられません。タイムアウトを無制限にするには**0**を指定します。 **既定:** 48
参加者の追加に失敗した場合の電子メール件名のプレフィックス	電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** 参加者を追加できません -
電子メール受信時にSSLを有効にする	POP3S/IMAPSで受信するか、またはPOP3/IMAPで受信するかを指定します。POP3S/IMAPSの場合、サーバーの証明書が必要になります。 HP Anywhereをインストールする場合、インストールで自動的にサーバーの証明書が生成されます。 証明書を手動で生成する必要がある場合は、JMX-Consoleに移動します ([**Host/diamond/jmx-console**] > [**diamond**] > [**CertificateJMX service**] > [**fetching certificate from trusted server**])。HP Anywhereのすべてのノードを再起動して、証明書を利用可能にしてください。(再起動が必要)。 **可能な値:** • **True:** POP3S/IMAPSで電子メールを送信 • **False:** POP3/IMAP経由電子メールを送信 **既定:** False
電子メールのCCによる参加者の追加を許可	HP Anywhereが返信のCCにある電子メールアドレスを、参加者としてアクティビティに追加する必要があるかどうかを指定します。 **既定:** False

電子メール (続き)

フィールド	説明
一般的な名前から電子メールを送信	電子メールのユーザーIDを指定します。可能な値: • **True:** 電子メールは、一般的な (仮の) 電子メールアドレスから送信されます。 • **False:** 電子メールは、メッセージを投稿したユーザーの電子メールから送信されます。電子メールサーバーでサポートされている場合にのみ、適用可能です。 **既定:** False
必須モードでの最終投稿から電子メール送信までのタイムアウト (分)	最後の投稿から電子メールがオフライン参加者に送信されるまでの時間 (分)。 **既定:** 5
電子メール受信ホスト	受信電子メールサーバーのURL。 既定のポートを使用するか、次のようにポートを指定できます。 <サーバー>:<ポート>
アクティビティIDが見つからない場合の電子メール件名	電子メールへの返信に関連します。HP Anywhereが着信電子メールをアクティビティと照合できない場合にのみ使用されます。 **既定:** RE: メッセージ配信上の問題
電子メール送信時にSSLを有効にする	HTTPSで送信するか、またはHTTPで送信するかを指定します。HTTPSの場合、サーバーの証明書が必要になります。 HP Anywhereをインストールする場合、インストールで自動的にサーバーの証明書が生成されます。 証明書を手動で生成する必要がある場合は、JMX-Consoleに移動します ([**Host/diamond/jmx-console**] > [**diamond**] > [**CertificateJMX service**] > [**fetching certificate from trusted server**])。HP Anywhereのすべてのノードを再起動して、証明書を利用可能にしてください(再起動が必要)。 **可能な値:** True、False **既定:** False
電子メール送信に使用するHP Anywhereユーザー名	電子メールの送信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザー名。 **既定:** N/A **例:** <サーバー>@<company.com>

電子メール (続き)

フィールド	説明
削除する電子メール署名形式	電子メールを送信する前に、返信から削除する会社の電子メール署名の形式を指定します。 **既定:** ${email};${firstName} ${lastName}
電子メール送信ホスト	SMTP電子メールサーバーのURL。 既定のポートを使用するか、次のようにポートを指定できます。 <サーバー>:<ポート>
電子メール受信に使用するHP Anywhereユーザーパスワード	電子メールへの返信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのパスワード。 **既定:** N/A
電子メール受信に使用するHP Anywhereユーザー名	電子メールへの返信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザー名。 **既定:** N/A
一時停止/再開の電子メール件名のプレフィックス	一時停止中のアクティビティがタイムアウトした場合に、電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** HPA: リマインダー -
電子メール受信プロトコル	電子メールの受信に使用するプロトコル。 **可能な値**: imap、pop3 **既定:** pop3
電子メール送信に使用するHP Anywhereユーザーパスワード	電子メールの送信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザーパスワード。 **既定:** N/A
電子メール送信までの最大タイムアウト (分)	最後の電子メールが送信されてから、別の電子メールがオフライン参加者に送信されるまでの時間 (分)。 **既定:** 20

添付ファイル

フィールド	説明
添付ファイルの説明の最大長さ (文字)	添付ファイルの説明に使用できる最大文字数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-260 **既定:** 256
最大添付ファイルサイズ (MB)	添付ファイルの最大サイズ (MB)。 **必須:** はい **可能な値:** 1-1000 **既定:** 50
添付ファイル名の最大長さ (文字)	ファイル名の最大文字数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-260 **既定:** 256
アクティビティごとの添付ファイルの最大容量	アクティビティに含めることができる添付ファイルの最大数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-100 **既定:** 50

添付ファイル (続き)

フィールド	説明
許可される添付ファイルタイプのホワイトリスト	許可される添付ファイルタイプ (拡張子でない) のカンマ区切りリスト。 **必須:** いいえ **可能な値:** • image - すべての種類の画像 • text - テキストファイル (ログを含む) • application/x-tika-ooxml - Word文書 (.docおよび.docx形式) • application/xml - XMLファイル • application/pdf - PDFファイル • application/x-tika-msoffice - Power Point、Excelファイル (.ppt、.xls) • application/x-tika-ooxml - Power Point、Excelファイル (.pptx、.xlsx) • application/x-rar-compressed - アーカイブ (rar) • application/zip - アーカイブ (zip) **既定:** image,text,application/pdf,application/zip,application/x-tika-ooxml,application/x-tika-msoffice,application/x-tika-ooxml
1時間あたりの (1人のユーザーの) 添付ファイルの最大合計サイズ (MB)	投稿やプロファイルピクチャーなどをユーザーが1時間あたりにアップロードできる添付ファイルの最大合計サイズ (MB)。

プロファイル

フィールド	説明
プロファイル検索の最大結果数	ユーザーの検索時に返す結果の最大数。 **既定:** 50

プロファイル (続き)

フィールド	説明
プロファイルのサムネイルの幅 (ピクセル)	アクティビティ参加者用に表示する画像の幅 (ピクセル)。 **既定:** 60
プロファイルの表示名をLDAPから取得	参加者のLDAPプロファイル名 (Smith, Alexなど) を表示するかどうかを指定します。[**False**] に設定すると、参加者の電子メールアドレス (alex.smith@mycompany.comなど) が表示されます。 **既定:**False
プロファイル検索のフィールドの優先度	各検索条件の優先度 **既定:** firstName、lastName、email
プロファイル画像の最大アップロードサイズ (MB)	アップロードするプロファイル画像の最大サイズ (MB)。 **既定:** 10
小さいプロファイル画像の幅 (ピクセル)	小さなプロファイル画像のサイズ (ピクセル) **既定:** 60
プロファイル検索の最小文字数	プロファイル★の検索で入力する最小文字数。 **既定:** 3
プロファイルキャッシュサイズ	検索後にキャッシュに格納されるユーザーの数 **既定:** 1000
Non-person name regular expression (for search optimization)	ユーザー名以外のフィールドを検索するときに使用できる正規表現。 **既定:** ^[^0-9@!@#$%^&*()<>{}"?~.;:/]*$
大きいプロファイル画像の幅 (ピクセル)	大きなプロファイル画像のサイズ (ピクセル) **既定:** 200

ブラック/ホワイトリスト

フィールド	説明
ブラック/ホワイトリストをアクティブにする	このHP Anywhereサーバーに接続しようとしているユーザーやデバイスに、HP Anywhereでブラックリストまたはホワイトリストを適用する場合に指定します。 リストの管理は**プロビジョンリスト**APIで行います。詳細については、「ユーザーとデバイスの管理 - ユーザー/デバイス接続の制限 (ブラック/ホワイトリスト)」(90 ページ) を参照してください。 **可能な値:** • **True**: [**リストタイプ**] と**プロビジョンリスト**APIに従ってブラックリストまたはホワイトリストをアクティブにします。このオプションにより、特定のユーザーやデバイスによるHP Anywhereへのアクセスを許可または防止できます。アクセス許可のないユーザーやデバイスがHP Anywhereにアクセスしようとした場合は、エラーメッセージが表示されます。 • **False**: ユーザーやデバイスによるHP Anywhereへのログイン時に、定義済みのブラック/ホワイトリストがHP Anywhereで考慮されません。 **既定:** False
リストタイプ	制限リストのタイプ。 **可能な値:** • **ホワイト**: HP Anywhereとアプリへのアクセスを特定のユーザーやデバイスにのみ許可します。このリストに含まれていないユーザーやデバイスはHP Anywhereにアクセスできません。 • **ブラック**: 特定のユーザーやデバイスによるHP Anywhereへの接続を防止します。組織内のすべてのユーザーやデバイスがHP Anywhereにアクセスできます。 **既定:** ブラック

カタログ設定

フィールド	説明
アプリの承認を常に確認	[**カタログフレーバー**] (後述) が [NONE] に設定されている場合に、関連する承認グループをHP Anywhereでエンドユーザーデバイスへのアプリのインストール時に考慮するかどうかを定義します。 **可能な値:** • **True**: 対象アプリに現在関連付けられているLDAP承認グループにエンドユーザーが含まれている場合にのみ、デバイスへのアプリのインストールをエンドユーザーに許可します。 • **False**: 対象アプリに関連付けられている承認グループとは関係なく、デバイスへのアプリのインストールをエンドユーザーに許可します。 **既定:** False
アプリ詳細のURL	取得するアプリ詳細のURL。このフィールドを空欄にした場合は、既定のHP Web ServicesカタログのURLが使用されます。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。
インストール済みアプリの承認を有効にする	アプリを承認グループでフィルターするかどうかを指定します。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。 **可能な値:** • **True**: HP Web Servicesカタログのディレクトリサービス (承認) グループに照らし合わせてユーザーを確認し、アプリのインストールがユーザーに許可されているかどうかを判定します。 • **False**: 対象アプリに関連付けられているディレクトリサービスグループとは関係なく、デバイスへのアプリのインストールをエンドユーザーに許可します。 **既定:** True
カタログリソースのURL	HP Web Servicesカタログで使用されるリソースのURL。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。
認証グループ同期用のURL	承認グループとHP Web Servicesカタログとの同期に使用されるURL。このフィールドを空欄にした場合は、既定のHP Web ServicesカタログのURLが使用されます。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。

カタログ設定 (続き)

フィールド	説明
インストール済みアプリケーションを同期する	ユーザーのログイン時に、HP Anywhereカタログでインストール済みアプリケーションと同期するのを有効にします。 **可能な値:** True、False **既定:** True
カタログフレーバー	このHP Anywhereサーバーに使用するカタログを定義します。 **可能な値:** WEB_OS、NONE、DEFAULT、INTEGRATED **既定:** Default
インストール済みアプリのリストを取得するためのURL	HP Web Servicesカタログからのインストール済みアプリの取得に使用されるURL。このフィールドを空欄にした場合は、既定のHP Web ServicesカタログのURLが使用されます。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。
カタログ同期承認間隔 (分)	HP AnywhereサーバーがLDAPグループ構造と同期する間隔 **既定:** 1440 (24時間)

スナップショット

フィールド	説明
小さいスナップショットの直径 (ピクセル)	小さいスナップショットの直径 (ピクセル)。 **既定:** 200
中程度のスナップショットの直径 (ピクセル)	中程度のスナップショットの直径 (ピクセル)。 **既定:** 750
モバイル用スナップショットの直径 (ピクセル)	モバイル用スナップショットの直径 (ピクセル)。 **既定:** 50
スナップショット画像の最大アップロードサイズ (KB)	スナップショットの最大アップロードサイズ (KB) **既定:** 5000

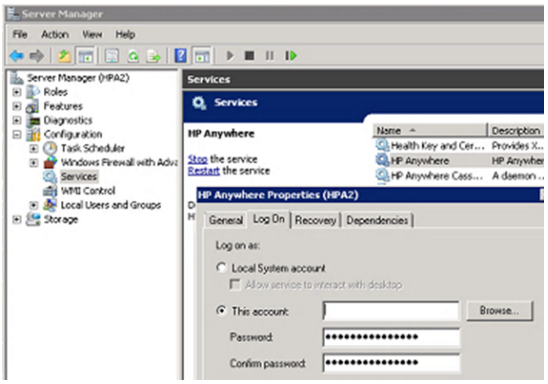
スナップショット (続き)

フィールド	説明
クライアント側でのスナップショットの最大キャッシュ時間 (秒)	クライアントによるスナップショットのHTTP要求の再送後の時間 (秒数)。 **既定:** 2592000
スナップショットのサムネイルの直径 (ピクセル)	スナップショットのサムネイルの直径 (ピクセル)。 **既定:** 100
大きいスナップショットの直径 (ピクセル)	大きいスナップショットの直径 (ピクセル)。 **既定:** 1500

Googleプッシュ通知 (GCM)

フィールド	説明
Google Cloud Messaging API キー	**既定:** N/A
HTTPプロキシのポート	その背後でHP Anywhereバックエンドサーバーが動作しているプロキシサーバーのポート番号。 **既定:** 8080
HTTPプロキシのURL	その背後でHP Anywhereバックエンドサーバーが動作しているプロキシサーバーのホスト名。 **既定:**N/A

ログ

フィールド	説明
クライアントログのパス	クライアントから受信したログの保存場所のパス。(ユーザーがHP Anywhereクライアント設定の**ログの送信**機能を使用してデバイスから直接送信できるログです。) **既定:** N/A このフィールドを空欄にした場合 (またはパスが正しくない場合) は、HP Anywhereサーバー上の**<HP Anywhereインストールフォルダー>/logs/userLog.log**ファイルに、受信したログが自動的に書き込まれます。 それ以外で別のパスを指定した場合は、HP AnywhereサーバーのIPアドレス (<HP AnywhereサーバーのIP>_userLog.logなど) がログファイル名に追加されます。これにより、複数のログが同じ場所に書き込まれた場合にログを区別できます。 **注:** パスの確認は行われません。また、パスが正しくない場合もエラーメッセージは表示されません。 **Tip:** 複数のHP Anywhereサーバーに対してこのフィールドを設定した場合は、すべてのサーバーに1か所からアクセスできるように、アクセス場所を1つ指定してください。例: \\<自身のIPアドレス>\C$\hpa_logs\logs_from_clients\... **重要:** HP Anywhereサーバー上の**HP Anywhere Service**は、必ずこの場所にアクセスできるユーザーが起動してください。それ以外の場合は、既定の場所にログが書き込まれます。たとえばWindowsでは、**[スタート] > [ファイル名を指定して実行] > services.msc > HP Anywhere**サービスで設定します。 

プロキシの構成

フィールド	説明
スキーム	HP Web Servicesカタログへのアクセス用プロキシサーバーのスキーム。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。
ポート	HP Web Servicesカタログへのアクセス用プロキシサーバーのポート。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。
ホスト	HP Web Servicesカタログへのアクセス用プロキシサーバーのホスト名またはIPアドレス。 [**カタログフレーバー**] が [**WEB_OS**] に設定されている場合にのみ可能です。

Appleプッシュ通知 (APNS)

フィールド	説明
APNS thread pool size	iOSデバイスに送信するためにHP Anywhereバックエンドサーバー上で同時に処理できる通知の最大数。 **必須:** いいえ **可能な値:** 1～500の整数 **既定:** 20
APNS証明書のパスワード	Appleの証明書パスワード **必須:** いいえ **可能な値:** パスワードを入力 **既定:** N/A
SOCKSプロキシのポート	iOSデバイスに通知を送信するためのSOCKSプロキシポート。 **必須:** いいえ **可能な値:** 1～65535の整数 **既定:**N/A

Appleプッシュ通知 (APNS) (続き)

フィールド	説明
SOCKSプロキシのURL	iOSデバイスに通知を送信するためのSOCKSプロキシURL。 **必須:** いいえ **可能な値:** URL文字列を入力 **既定:** N/A
APNS証明書のファイルパス	HP Anywhereサーバーのファイルシステムで Appleの証明書が格納されている場所。 **必須:** いいえ **可能な値:** HP Anywhereサーバー上のファイルパスを入力 **既定:** N/A

アクティビティ

フィールド	説明
[次] の表示設定	アクティビティワークスペースの [次] を表示または非表示にするかどうかを指定します。 **既定:** True
要求に対して返されるアクティビティの既定の数	アクティビティの検索時に検索結果でページごとに表示するアクティビティの既定の数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-100 **既定:** 10
アクティビティのインデックス作成のバルクサイズ	インデックスサーバー内のアクティビティのインデックス作成用のバルクサイズ。 **必須:** はい **可能な値:** 100-5000 **既定:** 500

アクティビティ (続き)

フィールド	説明
アクティビティのインデックス作成の最小間隔 (分)	アクティビティのインデックス作成操作間の最小間隔 (分)。 **既定:** 1
アクティビティ検索の最大結果数	アクティビティの検索時に返すアクティビティの最大数。 **必須:** はい **可能な値:** 1～2000の整数 **既定:** 1000
要求に対して返されるアクティビティの最大数	アクティビティの検索時に検索結果でページごとに表示するアクティビティの最大数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-100 **既定:** 50
非公開アクティビティのみを許可 アクティビティの表示設定は、アクティビティを組織内のすべてのユーザーに表示するのか、実際のアクティビティの参加者にのみ表示するのかを指定するプライバシー設定です。アクティビティは以下に設定できます。 **Private**: 現在アクティビティに組み込まれている参加者のみが、アクティビティを表示できます。private (非公開) アクティビティの検索結果は、アクティビティの参加者のみに表示されます。 **Public**:任意のユーザーが、public (公開) として定義されているアクティビティを検索および表示できます。	エンドユーザーがアクティビティを公開として定義できるかどうかを指定します。 **必須:** はい **可能な値:** • **True**: ▪ エンドユーザーが作成するすべてのアクティビティは非公開であり、アクティビティの参加者のみがアクセスできます。 ▪ エンドユーザーは、非公開アクティビティを公開に変更できません。 • **False**:(既定) エンドユーザーはアクティビティを [**public**] または [**private**] に設定できます。 **既定:**False

アクティビティ (続き)

フィールド	説明
新しいアクティビティの既定の表示設定 アクティビティの表示設定は、アクティビティを組織内のすべてのユーザーに表示するのか、実際のアクティビティの参加者にのみ表示するのかを指定するプライバシー設定です。アクティビティは以下に設定できます。 • **Private**: 現在アクティビティに組み込まれている参加者のみが、アクティビティを表示できます。private (非公開) アクティビティの検索結果は、アクティビティの参加者のみに表示されます。 • **Public**: 任意のユーザーが、public (公開) として定義されているアクティビティを検索および表示できます。 **既定:** PUBLIC	新しいすべてのアクティビティの既定値。 • **PRIVATE**: ▪ 新しいすべてのアクティビティが非公開に設定されます。 ▪ [**Allow private activities only**] が [**False**] に設定されている場合、必要に応じてユーザーはアクティビティを公開に設定できます。 • **PUBLIC**: ▪ 新しいすべてのアクティビティが公開に設定されます。 ▪ [**Allow private activities only**] (前述) は、[**False**] に設定する必要があります。 ▪ 必要に応じて、ユーザーはアクティビティを非公開に設定できます。 **既定:** PUBLIC

テナント電子メール

フィールド	説明
電子メール送信用の外部ホワイトリスト	電子メールを送信するための承認済みドメインの一覧。 セミコロン (;) を使用してドメインを区切ります (例: hp.com;google.com)。 **既定:** N/A
外部への電子メール送信	電子メールを外部ユーザー (組織以外の電子メールアドレス、John.Doe@gmail.comなど) に送信するかどうかを指定します。 **可能な値:** True、False **既定:** True

ファウンデーション設定

フィールド	説明
監査ログを有効にする	監査ログを書き込むかどうかを指定します。 **可能な値:** True、False **既定:** True
ユーザーリポジトリで大文字と小文字を区別	ユーザーリポジトリ内のユーザー名で大文字と小文字を区別するかどうかを指定します ("Jack" と"jack" が同じユーザーか、2つの異なるユーザー名か)。 **注:** ユーザーリポジトリで大文字と小文字が区別される場合、これを [**True**] に設定する必要があります。 **可能な値:** True、False **既定:** False
SAASのベースURL	SaaSサーバーのURL。 **可能な値:** N/A **既定:**N/A
ユーザーリポジトリタイプ	ユーザーリポジトリのタイプ **可能な値:** LDAP、SAAS、DB **既定:** ldap
JMX to HTTPを開く	JMXコンソールへのHTTPアクセスが許可されるかどうかを指定します。 **注:** これを [**False**] に設定する場合、JConsole経由でJMXに接続して行う必要があり、リモート接続を次に設定する必要があります: **localhost:29601** **可能な値:** True、False **既定:** True

サーバー

フィールド	説明
既定のアプリケーション名	HP Anywhereクライアントアプリケーションの上部に表示されるタイトル。これを使用して、自分自身の会社の名前などを設定できます。 HP Anywhereクライアントのテーマカラーとロゴをカスタマイズするには、[Brand Settings] と併せてこのフィールドを使用します。

サーバー (続き)

フィールド	説明
アプリケーションログインページ	ローカルまたはリモートサーバー上の (HP Anywhere) ログインページのパス。[アプリケーションログインページの相対パス] フィールドに絶対パスまたは相対パスが指定されている場合に指定します。 このページがローカルサーバー上に保存されている場合、ファイルは次のフォルダーに格納されています。**<HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\webapps** 例: **相対パス:** HPALogin\js\HPALogin-build.js **絶対パス:** <HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\webapps\ <マイサーバーのパス>:8080/HPALogin/js/HPALogin-build.js http://name.domain...../anycorrectpath/login.js
アプリケーションログインページの相対パス	アプリケーションログインページへのパスが相対パス (True) または絶対パス (False) の場合に指定します。 相対パスと相対的なパス: **<HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\webapps** このフィールドは [アプリケーションログインページ] と併せて使用します。
HP Anywhereサーバーの外部URL	組織外からHP Anywhereにアクセスする必要がある外部ユーザーのURL、たとえば、ロードバランサーのURL。 **既定:** HP AnywhereサーバーのURL

シングルサインオン設定

フィールド	説明
初期化文字列	多数のHP製品への接続に使用されるシングルサインオンの初期化文字列。

承認

フィールド	説明
ルート承認グループ	親のLDAPルートグループ。詳細については、「HP Anywhere のLDAPグループ」(12ページ) を参照してください。 **必須:** はい **既定:**N/A
承認グループの取得サイズ	LDAPから取得できるグループの最大数。 **既定:** 50
承認グループツリーの最大高さ	ルートノードから最も遠いサブノード (leaf) までのLDAP内のパスの長さ。 **既定:** 10

パブリッシュチャネル

フィールド	説明
プッシュ通知	プッシュ通知を許可するかどうかを指定します。 **可能な値:** True、False **既定:** True
電子メールをパブリッシュ	電子メール通知を許可するかどうかを指定します。 **可能な値:** True、False **既定:** False

プレゼンス

フィールド	説明
Comet切断からオフラインプレゼンスまでの秒数	ユーザーがオフラインと見なされるComet切断後の経過秒数。 **必須:** はい **可能な値:** 1-60 **既定:** 10

エントリポイント

フィールド	説明
エントリポイント状態の最大サイズ (KB)	サーバーに転送するエントリポイント状態の最大サイズ (KB) **既定:** 100

既定の通知チャネル

フィールド	説明
アプリのアラートの既定の通知チャネル	通知を参加者に送信する方法を指定します。 **可能な値**:FRONTPAGE、EMAIL、PUSH_NOTIFICATION、NONE **既定:** FRONTPAGE

通知

フィールド	説明
Cometのスリープ時間 (秒)	サーバーからクライアントへの応答送信に許される最大遅延時間 (秒数)。 **既定:** 22
Cometのスリープ時間 (秒)	サーバーからiOSクライアントへの応答送信に許される最大遅延時間 (秒数)。 **既定:** 8

アプリ

フィールド	説明
アプリの共通Webコンテキスト	ロードバランサー構成などのURLマッピングの簡略化に使用されます。これにより、複数のアプリが1つのコンテキストの下でそれらの呼び出しを実行できます。また、URLに共通Webコンテキストを含まないアプリを除外することで、自分のアプリのホワイトリストも作成できます。 たとえば、このフィールドに「OurApps」を指定した場合、アプリのURLがhttp://<サーバー>:<ポート>/<アプリ名>/...から次のURLに変わります。http://<サーバー>:<ポート>/OurApps/<アプリ名>/... URLは、リバースプロキシ/ロードバランサーと一致する必要があります。 **重要:** 共通Webコンテキストは、必ずアプリをデプロイする前に適用してください。アプリがすでにデプロイ済みの場合は、アプリを再度デプロイ(データは保持)し、この機能を適用してください。 **可能な値:** コンテキストには、最大20文字(文字と数字のみ)まで含めることができます。 **既定:** N/A

オフラインサポート

フィールド	説明
HP Anywhereでオフラインで作業できるようにする	インターネット接続がない場合に、HP Anywhereの起動、およびHP Anywhereとオフラインサポートを利用できる任意のアプリでの作業をユーザーに許可するかどうかを指定します。詳細については、「オフラインサポートの有効化」(74ページ)を参照してください。 スマートフォンおよびタブレットでのみ可能です。 **可能な値:** True、False **既定:** True

第4章

カタログ - 管理者が認識しておく必要がある事項

カタログには、エンドユーザーが使用できるアプリが集められています。カタログを保守するのは、管理者の仕事です。各HP Anywhereサーバーは、1つのカタログを使用して動作します。

いくつかの種類のカタログがあります。本ガイドでは、次について詳しく説明します。

- 「HP Web Servicesカタログ」(40ページ)
- 「既定のカタログ」(62ページ)

第5章

HP Web Servicesカタログ

HP Web Servicesカタログ内のHP AnywhereアプリとHP Anywhereサーバーを管理するのはHP Anywhere管理者の仕事です(管理者コンソールを使用)。

エンタープライズポータルでは同じアプリの複数のバージョンがサポートされますが、HP Anywhereでは、エンドユーザーに対して1つのバージョンしかサポートされません。このため、新しいバージョンのアプリを管理者コンソールにアップロードするたびに、前のバージョンが上書きされるため、インストールされた最新バージョンのみが利用できます。

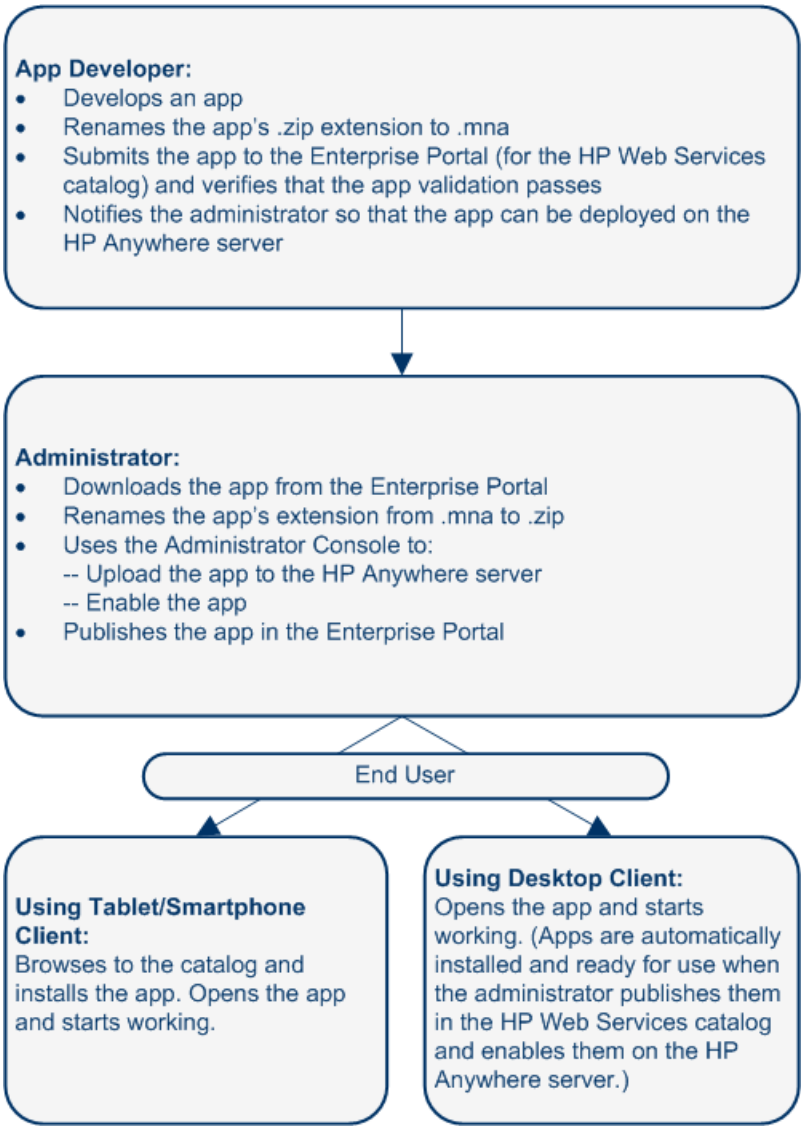
注: HP Anywhereで実行されるのはアプリのアップグレードまたは更新のみです。アプリがHP Anywhereサーバーからアンインストールされることはありません。ただし、必要に応じてエンドユーザーカタログでアプリを一時停止または無効にできます。

HP Web Servicesカタログ内のアプリ - 開発者からエンドユーザーまで

管理者は、HP Anywhere管理者コンソールとHPエンタープライズポータルを介して、エンドユーザーのアプリのライフサイクルを管理します。本項では、アプリの開発から配信までのフロー、およびエンドユーザーに各アプリへのアクセス権を付与するために実行する必要がある手順について説明します。

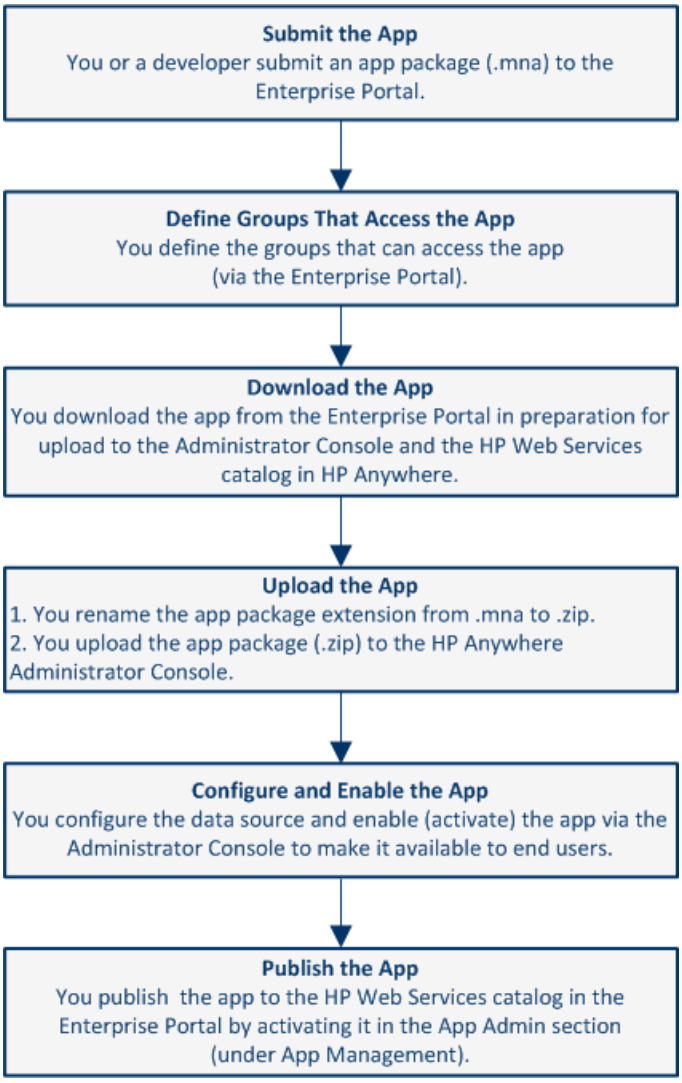
開発から配信まで

次の図は、組織のアプリがどのようにしてエンドユーザーまで配信されるかを示しています。



HP Web Servicesアプリをエンドユーザーまで配信するための管理者のタスク

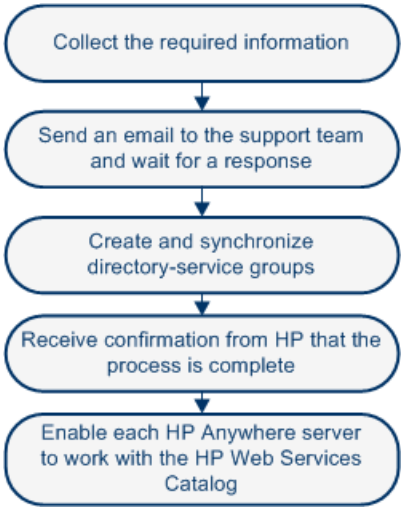
次の図は、組織のアプリをエンドユーザーまで配信可能にする際の管理者の役割を示しています。



詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ)を参照してください。

HP Web Servicesカタログ使用時の前提条件

HP Web Servicesカタログにアプリを追加してユーザーに使用許可を与える前には、エンタープライズポータルとHP Anywhereを統合できるように、次のように会社をHPに登録する必要があります。



統合方法を示した図については、「HP AnywhereによるHP Web Servicesカタログとユーザーの同期方法」(48ページ)を参照してください。

ステップ1: エンタープライズポータルとの統合に必要な情報の収集

最初のステップでは、エンタープライズポータルとHP Anywhereとの統合に必要な情報を準備します。

- **会社の情報:**

法人名:	
法人タイプ:	
DUNS (Data Universal Numbering System) ナンバー:	
会社の規模:	
会社のWebサイト:	
代表電話番号:	
会社のロゴ: (電子メールメッセージにファイルを添付してください (ステップ2参照)。ファイルタイプはPNGまたはJPG、最大サイズは幅200ピクセルx高さ100ピクセルです。)	

- **会社の住所:**

国名:	
住所:	
市町村名:	
都道府県名:	
郵便番号	

- **会社のHP Anywhere担当者の連絡先情報:**

氏名:	
部署および役職:	
電話番号:	
電子メールアドレス:	

- 会社の法務担当者の連絡先情報:

氏名:

役職:
電話番号:
電子メールアドレス:

- **HP AnywhereのIDプロバイダー (認証機関) についての情報:**

IDプロバイダーの名前:	
IDプロバイダーのURL:	
SAML署名証明書 (.crtファイル)。 (ファイルを圧縮して電子メールメッセージに添付してください。詳細は、「HP Web ServicesカタログのSAML証明書の作成」(57ページ) を参照してください。)	
証明書のパスワード (該当する場合):	

- HP Anywhere用に作成されたトップレベルのディレクトリサービスグループについての情報:

企業の管理者グループのグループ名: (企業の管理者の権限は、グループメンバーがエンタープライズポータルにログインできるように、このグループに手作業で割り当てます。)

- 3名のエンタープライズポータルユーザーのエンタープライズポータルログイン資格情報:

  ユーザータイプごとに正しい次の電子メールアドレスが必要です。

企業の管理者のユーザー名 (電子メールアドレス) (ep_enterprise_admin@mycompany.comなど):
開発管理者のユーザー名 (電子メールアドレス) (ep_developer_admin@mycompany.comなど):
開発者のユーザー名 (電子メールアドレス) (ep_developer@mycompany.comなど):

ステップ2: エンタープライズポータルとの統合を要請する電子メールの送信

上記ステップ1の情報を記載した電子メールメッセージを次のアドレスに送信します。
HPWS-HPASupport@hp.com

Tip: ステップ1の情報は、電子メールにコピー/ペーストできます。

- 「Onboarding」という語を件名に含めます。
- ステップ1に列挙した情報を電子メールメッセージの本文に記載します。
- ファイル(会社のロゴおよび圧縮した証明書ファイル)を添付します。

さらに必要な情報がある場合は、サポートチームのメンバーが問い合わせを行います。

サポートチームでは、電子メールの受信後、企業のエンタープライズポータル、アカウントサービス、およびアプリケーションカタログを実行するソフトウェアおよびデータベース要素のインスタンスを作成します。

この処理には約3営業日かかります。処理が終了すると、サポートチームが統合プロセスの完了に必要な残りのステップに関する問い合わせを行います。

ステップ3: ディレクトリサービスグループの作成と同期

アプリの公開時には、企業のディレクトリサービスのグループにアプリを関連付ける必要があります。これにより、関連付けられたグループのユーザーがアプリの閲覧とダウンロードを行えるようになります。

1. HP Web Servicesカタログに保存する、アプリの閲覧とアクセスを許可するユーザーのディレクトリサービスユーザーグループを作成します。
2. これらのグループをHP Anywhereに同期させてから、問い合わせ元の担当者にグループの準備が整ったことを通知します。

ディレクトリサービスユーザーグループの作成時には、次の点に注意してください。

- 企業アプリケーションへのアクセスを有効にすると、同時に機密情報へのアクセスも有効にすることになります。アプリへのアクセスに使用するグループとメンバーシップの変更を検討する際には、企業の他のITリソースにアクセスするグループを検討する際と同等の注意を払ってください。
- エンタープライズポータルのディレクトリサービスユーザーグループにアプリを関連付けると、そのグループのユーザーがHP Web Servicesカタログのアプリの閲覧とダウンロードを行えるようになります(互換性のあるデバイスを所有している場合)。
- 既存のグループを使用する前に、これらのグループに関連付けるすべてのアプリが対象として妥当かどうか、およびグループのすべてのユーザーにアクセスを許すことが妥当かどうかを検討してください。
- アプリ関連のメンテナンスが可能な限り「メンテナンスフリー」となるようなグループを設定してください。
- 極めて機密性の高い企業情報(財務情報や人事情報など)へのアクセスが一部の企業アプリによって有効になる場合は、そのようなアプリへのアクセスを許可するグループを管理する際に、極めて機密性の高い情報へのアクセスを申請する既存の手順を尊重してください。
- 同期は、24時間ごと、およびHP Anywhereサーバーの起動時に行われます。

ステップ4: 3名のエンタープライズポータルユーザーの準備が整ったことを伝える確認の受信

サポートチームでは、グループとHP Anywhereとの同期が正常に行われたことを確認した後、上記でユーザー名の提供を受けた3名のエンタープライズポータルユーザーを作成します。

また、エンタープライズポータルユーザーの作成に続けて、プロセスが完了したことを通知します。これにより、エンタープライズポータルとアプリケーションカタログが使用できるようになります。

ステップ5: HP Anywhere管理者コンソールでのHP Web Servicesカタログの設定

各HP Anywhereサーバーは、一度に1つのカタログを使用します。HP AnywhereにHP Anywhere Web Servicesカタログの使用を許可するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールの[一般設定]タブで、[**カタログ設定**]に移動します。
2. [**カタログフレーバー**]を[**WEB_OS**]に設定します。
3. HP Anywhereサーバーを再起動して変更内容を反映します。

HP AnywhereによるHP Web Servicesカタログとユーザーの同期方法

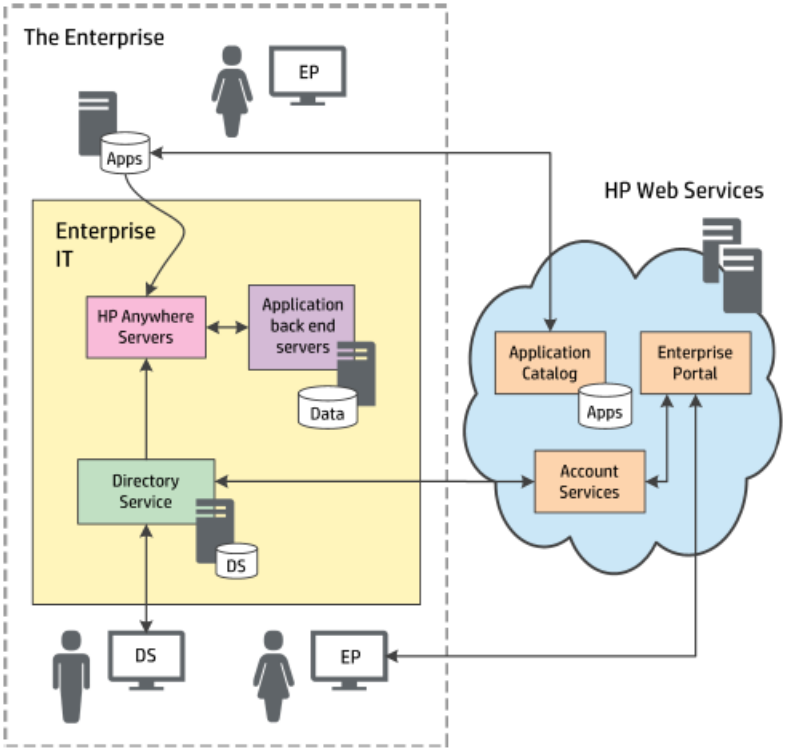
企業を登録することで、HP Anywhereと会社のアプリおよびユーザーとの同期をHPで行えるようになります。

エンタープライズポータル: エンタープライズポータルはHPで動作し、HPで実行中の他のHP Anywhereコンポーネントとの通信を行います。

アカウントサービス: アカウントサービスは、ITインフラストラクチャーとの通信を行って、グループメンバー情報の取得とエンタープライズポータルユーザーの認証を行います。

アプリケーションカタログ: アプリケーションカタログ (HP Web Servicesカタログ) には、企業ユーザーによる個人のモバイルデバイス上での使用を企業が認めたアプリが含まれています。

次の図に、HP Anywhereとクラウドで表したHP Webサービスとの統合の様子を示します。



アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ

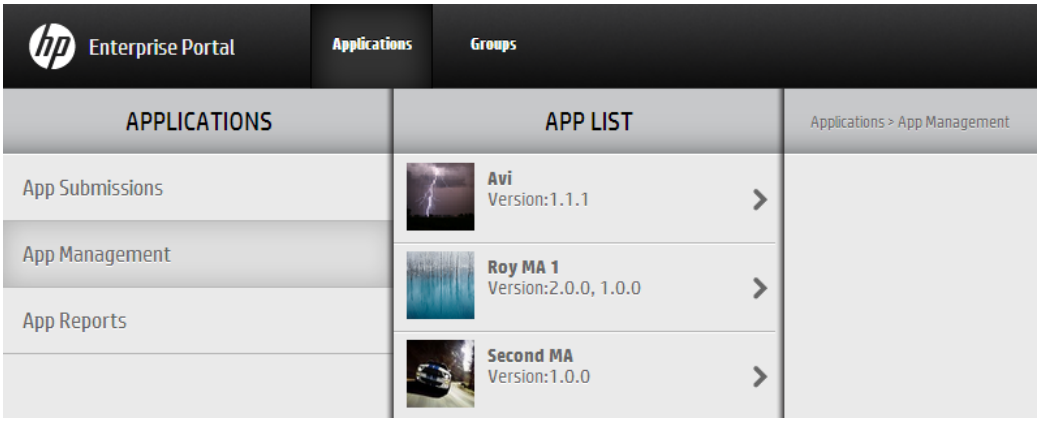
エンタープライズポータルをHP Anywhereと統合したら(「HP Web Servicesカタログ」(40ページ)を参照)、アプリをHP Web Servicesカタログにデプロイして、エンドユーザーがアクセスできるようにすることができます。

アプリをHP Web Servicesカタログにデプロイするには、次の手順を実行します。

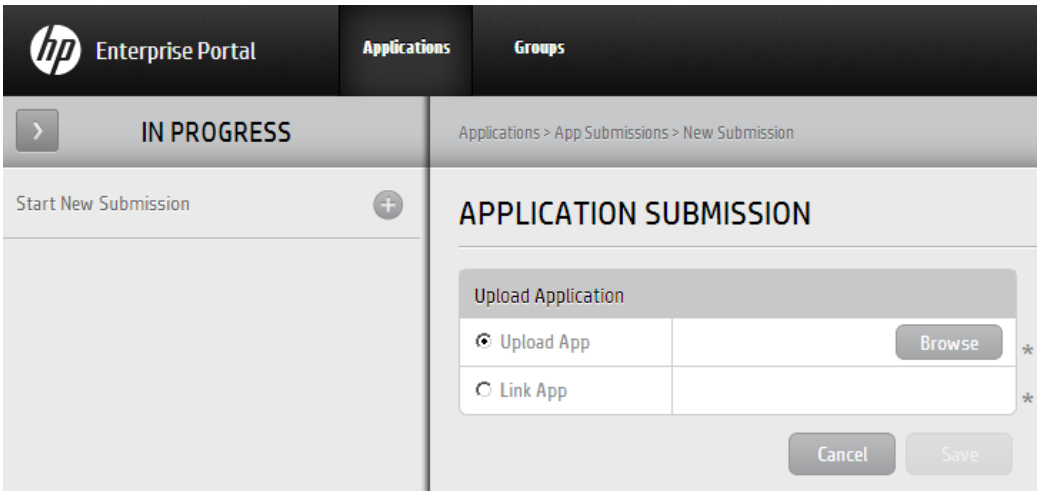
1. アプリをエンタープライズポータルに送信します。

   a. エンタープライズポータルとHP Anywhereとの統合の設定時に受け取った資格情報を使用して、エンタープライズポータルにログインします。

   b. [Applications] タブをまだ開いていない場合は、ウィンドウの上部にある [**Applications**] タブをクリックします。既定では、[App Management] タブが開きます。



   c. [Applications] ペインで、[**App Submissions**] タブをクリックします。[Application Submission] ペインが開きます。



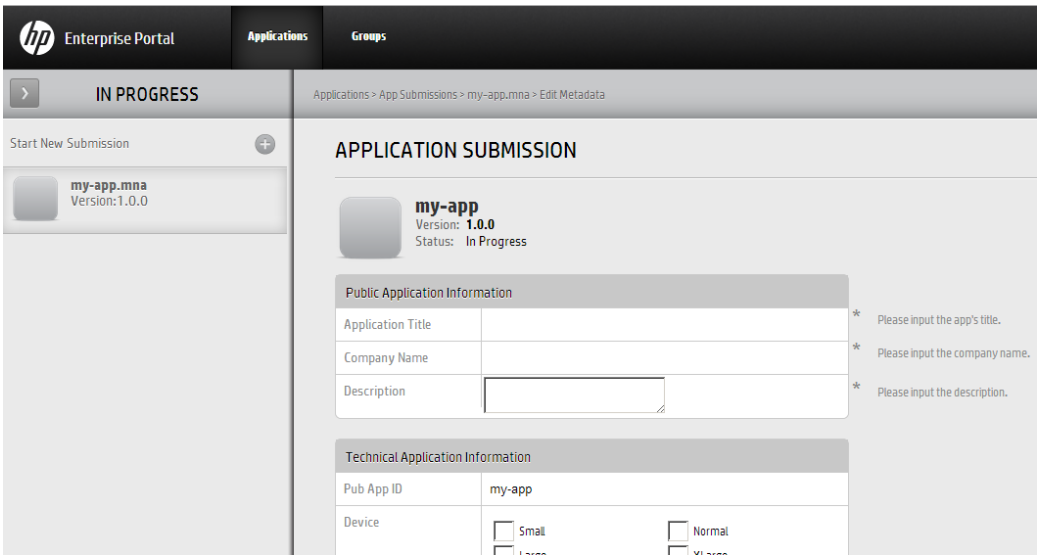
d. [**Start New Submission**] の横にある+ボタンをクリックします。次に [**Upload App**] を選択して、[**Browse**] をクリックし、ファイルシステム内のアプリパッケージを参照してアップロードします。

> **注 :** アプリ名がアプリパッケージの命名規則 (「付録A: HP Web Servicesカタログ内のアプリの命名規則」(61ページ) を参照) に一致し、**.mna**拡張子が付いていることを確認します(必要に応じて、アップロードする前にファイルシステム内のアプリの名前を変更します)。
>
> **例 :** my-app.mna

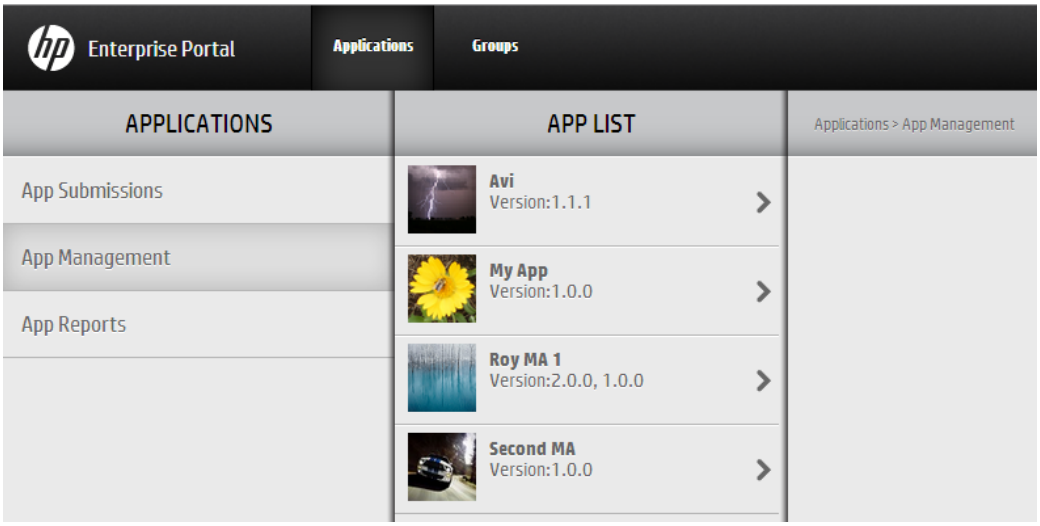
e. [**Save**] をクリックします。次に確認ボックスの [**Yes**] をクリックして、送信プロセスを開始します。エンタープライズポータルがアプリを確認し、次のような確認を行います。

- ファイルタイプがMNAであること
- ファイル構造とフォルダーが有効であること
- アプリIDがエンタープライズポータル内で一意であること

f. [Application Submission] ペインで、関連する情報を入力します。



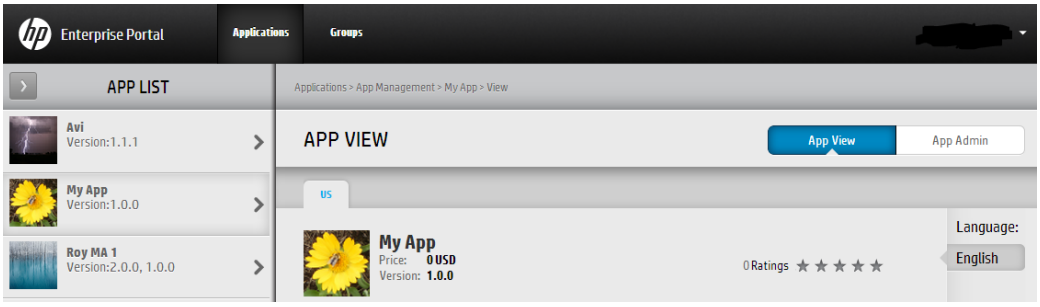
g. [**Save**] をクリックします。次に確認ボックスの [**Yes**] をクリックして、送信プロセスを完了します。アプリが [**App Management**] の下にある [**App List**] に追加されます。



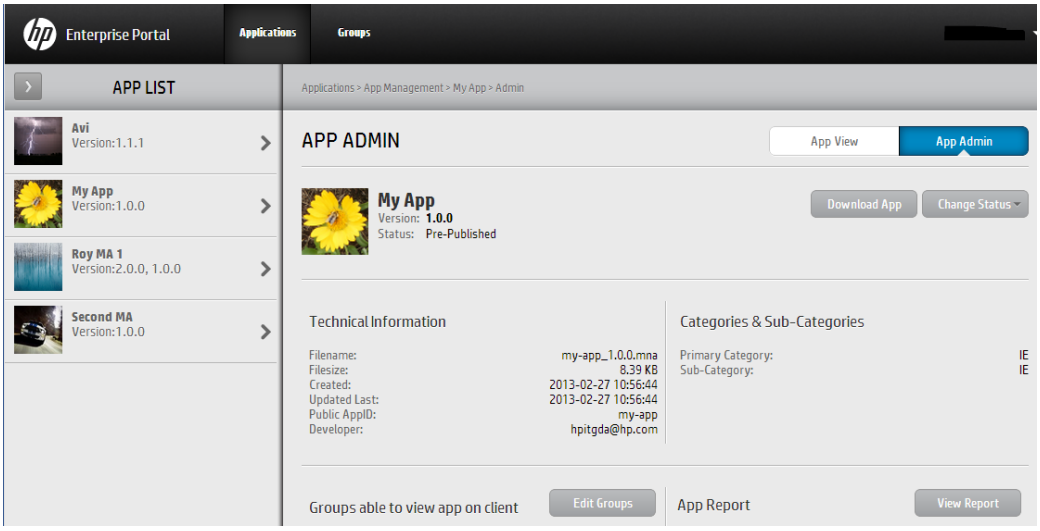
2. 次の手順でアプリにアクセスできるグループを定義します。

   a. [Applications] ペインで、[**App Management**] を選択します。

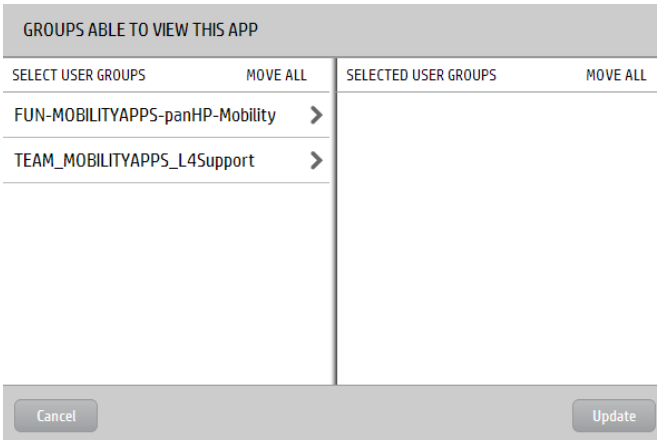
   b. [App List] ペインで、送信済みのアプリを選択します。[App View] ペインにアプリが表示されます。



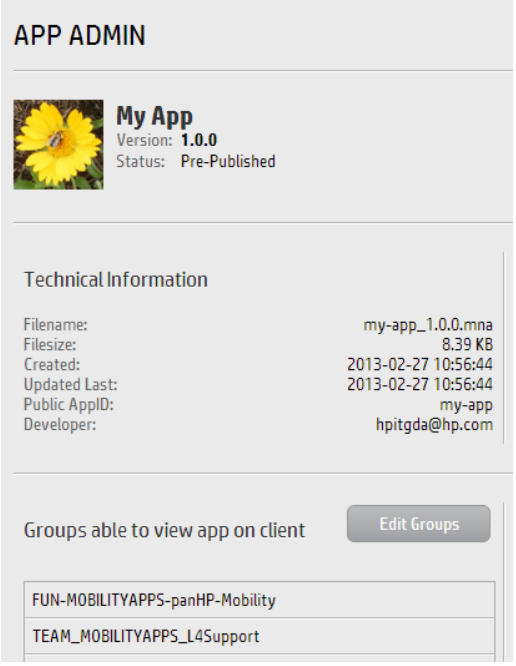
c. [App View] ペインで、[**App Admin**] をクリックします。[App Admin] ペインが開きます。



d. [**Edit Groups**] をクリックします。[**Groups Able to View This App**] ボックスが開き、ユーザーグループの一覧が表示されます。この一覧はHP Anywhereによって入力され、24時間ごとに同期されます。



e. 関連するグループを右側にある [Selected User Groups] ペインに移動し、[**Update**] をクリックします。グループが [App Admin] ペインに追加されます。

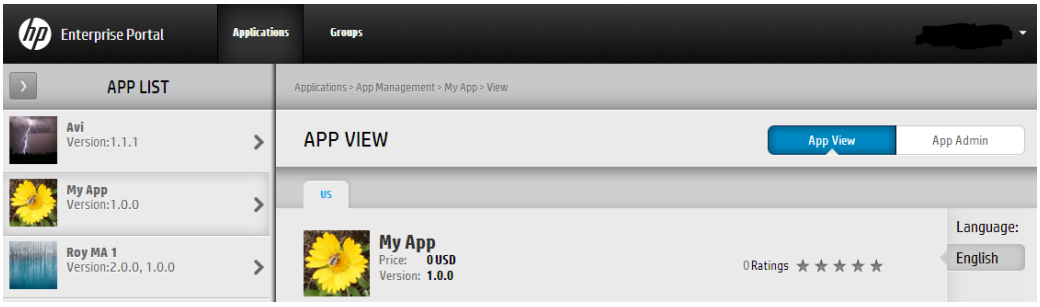


注: 必要に応じて、アプリをHP Anywhere HP Web Servicesカタログに追加する担当者に、アプリをHP Anywhereにデプロイする準備ができたことを通知します。

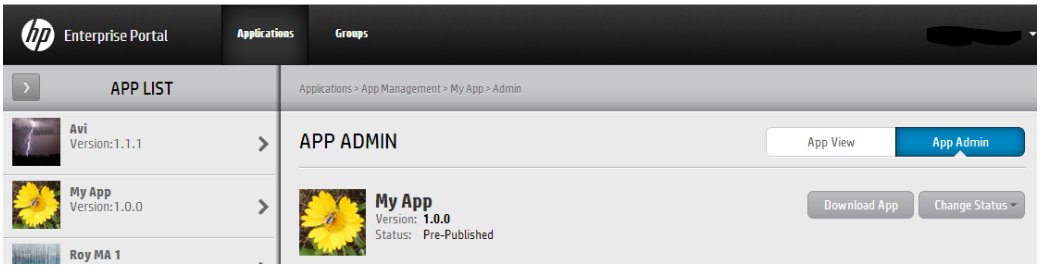
3. 次の手順でエンタープライズポータルからアプリをダウンロードします。

   a. [Applications] ペインで、[**App Management**] を選択します。

   b. [App List] ペインで、送信済みのアプリを選択します。[App View] ペインにアプリが表示されます。



c. [App View] ペインで、[**App Admin**] をクリックします。[App Admin] ペインが開きます。



d. [**Download App**] をクリックして、アプリをファイルシステム内の都合のいい場所に保存します。アプリがバージョン番号が追加された状態 (**<**アプリ名**>-descriptor.xml**ファイルで定義される) で保存されます。たとえば、my-app_1.0.0.mnaです。

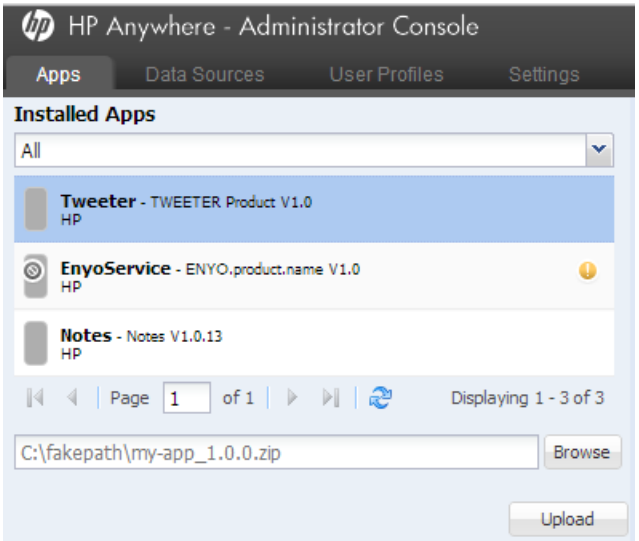
e. アプリの**.mna**拡張子を**.zip**に変更します。

4. アプリを管理者コンソールにアップロードします。

a. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ) を参照してください。

b. **初めてアプリをアップロードする場合、次の手順を実行します。**管理者コンソールの [General Settings] タブで、[**Catalog settings**] に移動し、[**Catalog flavor**] が [**WEB_OS**] に設定されていることを確認します。この値を変更する場合、変更を有効にするには、サーバーを再起動する必要があります。

c. 管理者コンソールの [Apps] タブで、[**Browse**] ボタンをクリックします。[Open] ダイアログボックスで、関連する <アプリ名 >.zipファイルを参照して選択し、[**Open**] をクリックします。



d. [**Upload**] をクリックします。

e. 確認ボックスで、[**Yes**] をクリックします。アプリがアップロードされ、自動的にデプロイされます。新しいアプリは [**Installed Apps**] の一覧に追加されます。

> **注:** デプロイメントが失敗する場合は、<HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\logsの**hpanywhere-stderr**ログファイルを確認してください。

5. 「アプリのデータソースの定義」(71ページ)の説明にしたがって、アプリのデータソースを設定します。

6. 次の手順でアプリ固有の設定を定義します。
   a. 管理者コンソールの [Apps] ペインで、有効にするアプリを選択します。

   b. 右側のペインで、必要に応じて [**Settings**] を選択して、値を変更します。

7. 次の手順で、アプリをHP Anywhere管理者コンソールで有効にします。

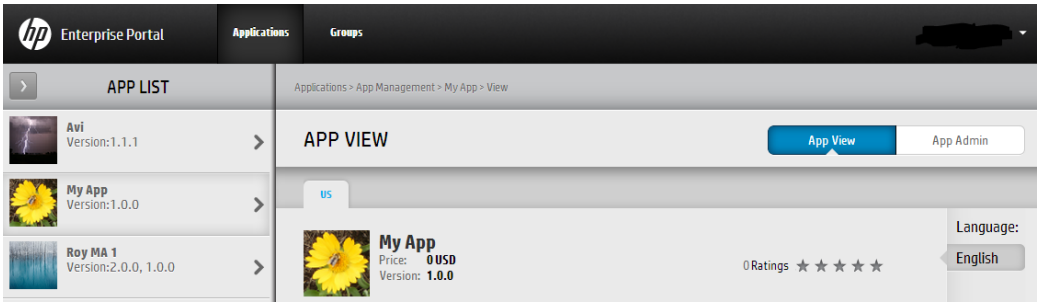
   a. 管理者コンソールの [Apps] ペインで、有効にするアプリを選択します。

   b. 右側のペインで、[**Enable**] をクリックします。エンタープライズポータルとHP Anywhereとの次回の同期以降、アプリがエンドユーザーに対してアクセス可能になります。

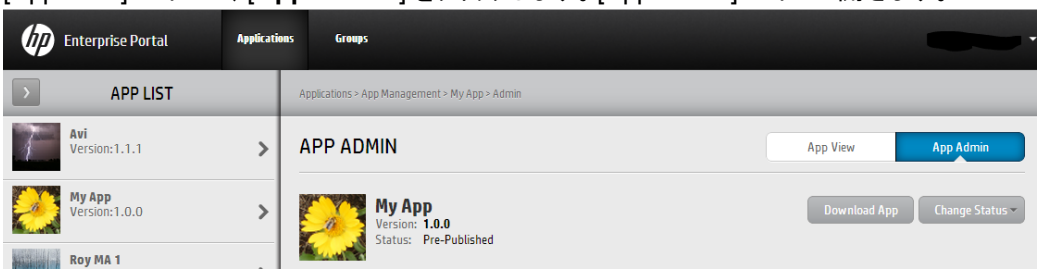
8. アプリをエンタープライズポータル経由でエンドユーザーのHP Web Servicesカタログに公開します。

   a. エンタープライズポータルの [Applications] ペインで、[**App Management**] を選択します。

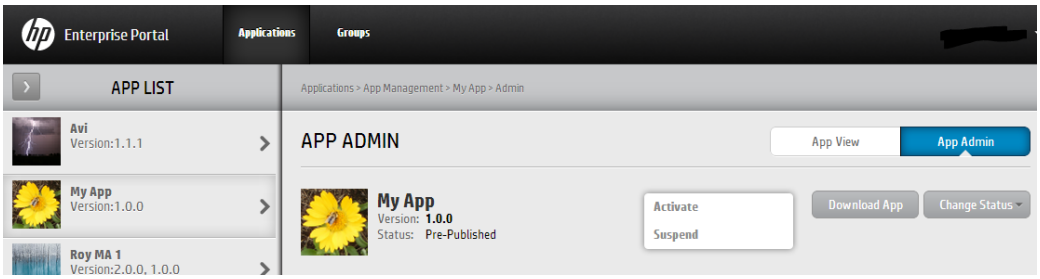
   b. [App List] ペインで、送信済みのアプリを選択します。[App View] ペインにアプリが表示されます。



   c. [App View] ペインで、[**App Admin**] をクリックします。[App Admin] ペインが開きます。



   d. [**Change Status**] をクリックし、[**Activate**] を選択します。



HP Anywhereとの次回の同期の後に、アプリがHP Anywhereで利用可能になります。この同期は24時間ごとに行われます。

HP Web ServicesカタログのSAML証明書の作成

HP Web Servicesカタログを使用するには、SAML証明書を使用する必要があります。

SAML証明書を作成するには、次の手順を実行します。

1. テキストエディターで次の操作を行います。
   a. **<HP Anywhereインストールフォルダー>/scripts/CreateSamlSelfSignedCertificate.bat**を開きます。

   b. **@btoaw.host.fqdn@**をHP Anywhereサーバーホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) に置き換えます。例:SET HOST_FQDN=@btoaw.host.fqdn@をSET HOST_FQDN=myserver.comに変更します。

2. **<HP Anywhereインストールフォルダー>/scripts/CreateSamlSelfSignedCertificate.bat**を実行します。このバッチファイルは、**../jre/lib/security**の下に2つの証明書ファイルを作成します。

   - keystore.jks - 証明書全体を含みます (パブリック/プライベートピア)

   - hpapublic.cer (パスワード – hpapwd) HP Web Services用の公開鍵を含みます

3. 個々のHP Anywhereサーバーで、既存の**keystore.jks**ファイル (**<**HP Anywhereインストールフォルダー**>\conf\keystore.jks**) を新たに生成されたファイルで上書きします。

   注: 既存の**keystore.jks**ファイルは、上書きする前に必ずバックアップしてください。

4. 新しく生成した証明書を適用するには (または独自の証明書を持っている場合)、**<HP Anywhereインストールフォルダー>/conf/saml.properties**ファイルで適切なプロパティを設定します。例:

```
keyStoreType=JKS
keystoreName= hpasaml
keyStorePassword=hpapwd
privateKeyPassword= hpapwd
algorithmName=http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#rsa-sha1
lookForKeyStoreInClasspath=false
privateKeyDefaultAliasName=hpasaml
certificateDefaultAliasName=hpasaml
keyStorePath=../jre/lib/security/keystore.jks
recipient=https://token.palmws.com
audienceURI=https://www.palmws.com
issuer=https://HPAnywhere.com
```

HP Web Servicesカタログ内のアプリバージョンのアップグレード

必要に応じて、アップグレード (置換) されたアプリバージョンを含めるようにHP Web Servicesカタログを更新できます。

HP Web Servicesカタログ内のアプリバージョンをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. エンタープライズカタログを開き、アップグレードするアプリを選択して、[App Admin] ペインに移動します。詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ) の手順1と2を参照してください。

2. [**Full Update**] をクリックします (アプリを少なくとも一度アクティブ ([Published] ステータスに設定) にした場合にのみ使用できます)。

3. 置換バージョンをHP Web Servicesカタログに送信します。詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ) の手順1を参照してください。

4. アプリをHP Anywhereの管理者コンソールとHP Web Servicesカタログにアップロードするために、エンタープライズポータルからダウンロードします。詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ) の手順4を参照してください。

5. HP Anywhere管理者コンソールで、アプリを無効にします。それには、[Apps] タブでアプリを選択し、ウィンドウの右側にある [**Disable**] をクリックします。

6. 次のように、HP Anywhereサーバーから前のアプリバージョンのファイルを削除します。
   a. HP Anywhereサーバーを停止します (**[スタート] > [HP] > [HP Anywhere] > [Stop HP Anywhere Server]**)。

   b. **HP Anywhereインストールフォルダー>/tomcat/webappsを参照します。**

   c. 以下を削除します。

      - **<アプリ名> フォルダー**
      - **<アプリ名>.WARファイル**
      - **<アプリ名>.ZIPファイル**

   d. HP Anywhereサーバーを起動します (**[スタート] > [HP] > [HP Anywhere] > [Start HP Anywhere Server]**)。

7. アプリを管理者コンソールにアップロードします。詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ) の手順5を参照してください。

   注: アップロードしようとしているアプリのバージョンが以前にアップロードしたバージョンと異なることを確認します。

8. 管理者コンソールで、アプリを有効にします。それには、[Apps] タブでアプリを選択し、ウィンドウの右側にある [**Enable**] をクリックします。

9. アプリを一時停止した場合は、エンタープライズポータルで公開します。詳細については、「アプリのHP Web Servicesカタログへのデプロイ」(49ページ) の手順3を参照してください。

エンドユーザーのHP Web Servicesカタログからのアプリの削除

アプリをHP Anywhereサーバーまたはエンタープライズポータルにインストールした後に、アプリのアンインストールはできませんが、次のいずれかの方法で管理者以外のエンドユーザーに対して使用不可にすることはできます。

- **HP Anywhere管理者コンソール経由ですべてのエンドユーザーに対してアプリを同時に無効にします。**

  a. 管理者コンソールの [Apps] タブで、アプリを選択します。

  b. ウィンドウの右側で、[**Disable**] をクリックします。これで、アプリがHP Anywhereクライアントの [My Apps] ページから削除されます。

- **エンタープライズポータル経由ですべてのエンドユーザーに対してアプリを同時に無効にします。**

  a. [Applications] ペインで、[**App Management**] を選択します。次に、[App List] ペインで削除するアプリを選択します。

  b. ウィンドウの右側で、[**Change Status**]、[**Suspend**] の順にクリックします。

- **エンタープライズポータルで特定のユーザーグループとの関連付けを削除します。**

  a. [Applications] ペインで、[**App Management**] を選択します。

  b. [App List] ペインで、削除するアプリを選択します。

  c. ウィンドウの右側で、[**App Admin**] をクリックします。

  d. [**Edit Groups**] をクリックします。削除するグループを左側のペインに移動し、[**Update**] をクリックします。

注 : アプリを無効にすると、エンドユーザーは使用できなくなります。ただし、管理者コンソールの [**Installed Apps**] の一覧にはまだ表示されており、アプリをテストまたは再度有効にする場合に、アクセスすることができます。

付録A: HP Web Servicesカタログ内のアプリの命名規則

本項では、HP Web Servicesカタログ内のアプリのエンタープライズポータル命名規則の一覧を示します。

項目	命名規則
アプリパッケージ	• エンタープライズポータル内、およびHP Anywhere管理者コンソールのアプリ一覧内で一意である必要があります • 2048文字を超えてはなりません • ファイル名は次の形式である必要があります:<アプリID>_<バージョン>_*.mna • 次の文字を含むことができます:小文字 (a-z)、大文字 (A-Z)、数字 (0-9)、ピリオド (.)、およびハイフン (-) • アンダースコア (_) は、公開のアプリIDとバージョンを区切るためにのみ使用できます
アプリ名	• エンタープライズポータル内、およびHP Anywhere管理者コンソールのアプリ一覧内で一意である必要があります • 小文字で始まる必要があります • 128文字を超えてはなりません • 次の文字を含むことができます:小文字 (a-z)、大文字 (A-Z)、数字 (0-9)、ピリオド (.)、およびハイフン (-)
バージョン番号	• ピリオドで区切られた3つの数を含む必要があります。例: 1.0.32 • それぞれの数は1～4桁の数である必要があります。例: 1.234.5678 • 0.0.0は許可されません

第6章

既定のカタログ

既定のカタログを管理するのは、HP Anywhere管理者の仕事です。次の内容が含まれます。

- 管理者コンソール経由でアプリをHP Anywhereサーバーにアップロードし、それらのアプリをカタログに追加する
- 必要なデータソースと設定 (存在する場合) を構成後にアプリを有効にする
- アプリをLDAPグループに関連付け、エンドユーザーがアプリにアクセスできるようにする
- エンドユーザーによるアクセスを望まないアプリを無効にする

新しいバージョンのアプリをアップロードしてカタログに追加するたびに、前のバージョンが上書きされるため、インストールされた最新バージョンのみが利用できます。

注: HP Anywhereで実行されるのはアプリのアップグレードまたは更新のみです。アプリがアンインストールされることはありません。ただし、アプリの構成を変更したり、必要に応じてアプリを無効にできます。

アプリを既定のカタログに追加するには、次の手順を実行します。

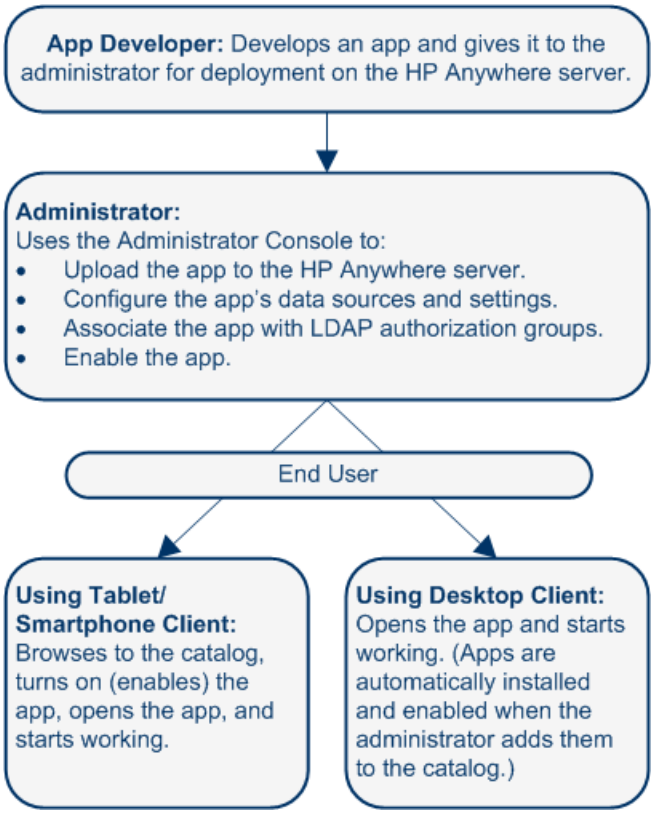
1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールへのログインおよびログアウト」(15ページ) を参照してください。
2. 「既定のカタログへのアプリのアップロード」(65ページ) の説明にしたがってアプリをインストールします。
3. 必要に応じて、アプリのデータソースを定義します。詳細については、「アプリのデータソースの定義」(71ページ) を参照してください。
4. 「グローバル設定とアプリ固有の設定の定義」(70ページ) の説明にしたがってアプリの設定を変更します。
5. 「HP AnywhereのLDAPグループ」(12ページ) の説明にしたがって、LDAP承認グループを各アプリに関連付けます。
6. 「エンドユーザーに対するアプリの有効化」(68ページ) の説明にしたがってアプリを有効にします。

既定のカタログ内のアプリ - 開発者からエンドユーザーまで

管理者は、管理者コンソールを介してエンドユーザーのアプリのライフサイクルを管理します。本項では、アプリの開発から配信までのフロー、およびエンドユーザーに各アプリへのアクセス権を付与するために実行する必要がある手順について説明します。

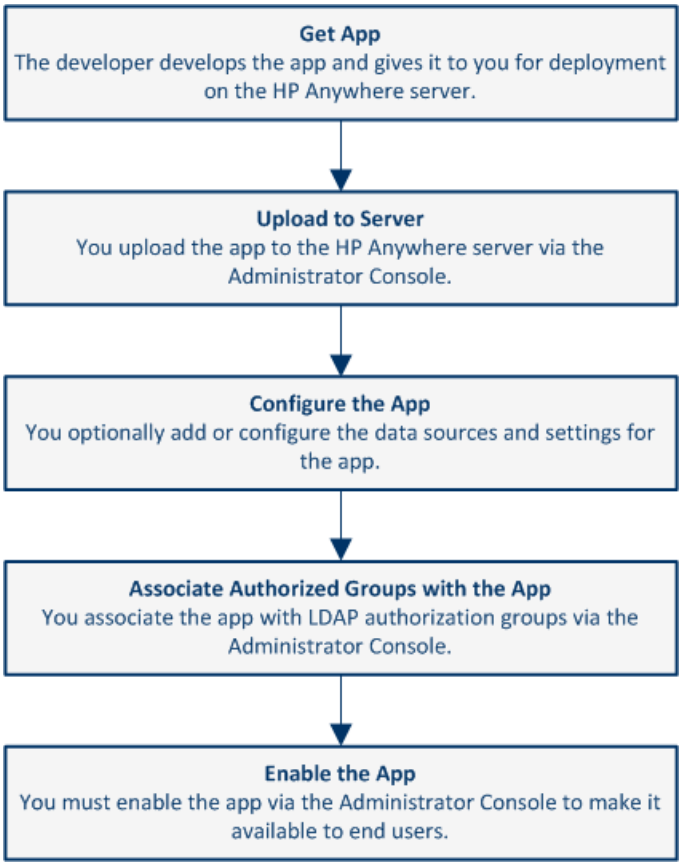
開発から配信まで

次の図は、組織のアプリがどのようにしてエンドユーザーまで配信されるかを示しています。



アプリをエンドユーザーまで配信するための管理者のタスク

次の図は、組織のアプリをエンドユーザーまで配信可能にする際の管理者の役割を示しています。



詳細については、以下を参照してください。

- 「既定のカタログへのアプリのアップロード」(65ページ)
- 「グローバル設定とアプリ固有の設定の定義」(70ページ)
- 「アプリのデータソースの定義」(71ページ)
- 「LDAP承認グループとアプリの関連付け」(67ページ)
- 「エンドユーザーに対するアプリの有効化」(68ページ)

既定のカタログへのアプリのアップロード

アプリをエンドユーザーが利用できるようにする最初のステップは、そのアプリをHP Anywhereサーバーにアップロードすることです。この作業は管理者コンソールで行います。

アプリをアップロードすると、管理者特権を持つユーザーがそのアプリをすぐに利用できるようになります。これにより、アプリをテストしたり、アプリを他の管理者以外のエンドユーザーに有効にする前に使用したりできます。

アプリをHP Anywhereサーバーにアップロードするには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールへのログインおよびログアウト」(15ページ)を参照してください。

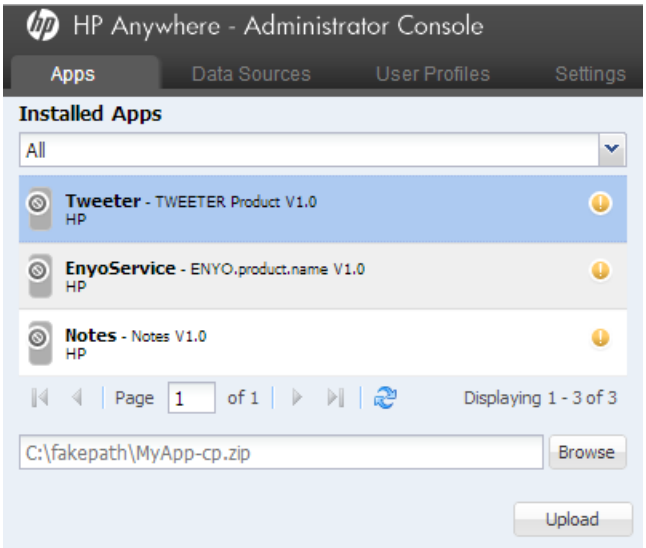
2. **初めてアプリをアップロードする場合、次の手順を実行します。**

   a. 管理者コンソールの[General Settings]タブで、[**Catalog settings**]に移動し、[**Catalog flavor**]が[**DEFAULT**]に設定されていることを確認します。

   b. LDAPの前提条件が満たされていることを確認します。詳細については、「HP Anywhere用のLDAP構成の前提条件」(12ページ)を参照してください。

3. 開発者からアプリの.zipファイルを取得します。

4. 管理者コンソールの[Apps]タブで、[**Browse**]ボタンをクリックします。[Open]ダイアログボックスで、関連する<アプリ名>.zipファイルを参照して選択し、[**Open**]をクリックします。



5. [**Upload**]をクリックします。

6. 確認ボックスで、[**Yes**]をクリックします。アプリがアップロードされ、自動的にデプロイされます。新しいアプリは[**Installed Apps**]の一覧に追加されます。

ヒント： デプロイメントが失敗する場合は、<HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\logsの**hpanywhere-stderr**ログファイルを確認してください。

既定のカタログ内のアプリバージョンのアップグレード

必要に応じて、アップグレード (置換) されたアプリバージョンを含めるように既定のカタログを更新できます。

別のアプリバージョンをHP Anywhereサーバーにアップロードするには、次の手順を実行します。

1. HP Anywhereサーバーを停止します (**[スタート] > [HP] > [HP Anywhere] > [Stop HP Anywhere Server]**)。
2. **HP Anywhereインストールフォルダー>/tomcat/webappsを参照します。**
3. 以下を削除します。
   - **<アプリ名>フォルダー**
   - **<アプリ名>.WARファイル**
   - **<アプリ名>.ZIPファイル**
4. HP Anywhereサーバーを起動します (**[スタート] > [HP] > [HP Anywhere] > [Start HP Anywhere Server]**)。
5. 「既定のカタログへのアプリのアップロード」(65ページ) の説明にしたがって置換バージョンをアップロードします。

   注: アップロードしようとしているアプリのバージョンが以前にアップロードしたバージョンと異なることを確認します。

ヒント: デプロイメントが失敗する場合は、<HP Anywhereインストールフォルダー>\tomcat\logs の**hpanywhere-stderr**ログファイルを確認してください。

LDAP承認グループとアプリの関連付け

アプリは、LDAP承認グループ経由でエンドユーザーにマッピングされます。これにより、アプリを個々のエンドユーザーに割り当てる代わりに、組織の役割またはその他の関連する条件にしたがってエンドユーザーに割り当てることができます。

LDAPグループの定義の詳細については、「HP AnywhereのLDAPグループ」(12ページ) を参照してください。

1つまたは複数のLDAP承認グループをアプリに関連付けるには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールが開かれていることを確認します。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ) を参照してください。
2. [Apps] タブで、アプリを選択します。

3. ウィンドウの右側で、[**Associated Authorization Groups**] タブを選択し、[**Add Groups**] をクリックします。[Add Authorization Groups] ダイアログボックスが開きます。

4. アプリに関連付けるLDAPグループを選択し、[**Add**] をクリックします。

> **ヒント：** [**Ctrl**] キーを押しながら選択すると、複数のグループを選択できます。

選択したグループに割り当てられたすべてのユーザーは、アプリが [**Enable**] に設定されていれば、そのアプリにアクセスできます。

エンドユーザーに対するアプリの有効化

アプリを有効にすると、アプリが関連付けられている任意のLDAP承認グループ内のエンドユーザーがそのアプリを使用できるようになります。

アプリを有効にする前に、関連する構成が設定されていることを確認しておく必要があります。たとえば、アプリのデータソースを構成するか、アプリ固有の設定を変更する必要があります。

> **注：** アプリをHP Anywhereサーバー上にインストールした後、アプリのアンインストールはできませんが、次に説明するようにエンドユーザーに対して使用不可にすることはできます。

アプリを有効にしてユーザーが既定のカタログからアクセスできるようにするには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールが開かれていることを確認します。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ) を参照してください。

2. 管理者コンソールの [Apps] ペインで、有効にするアプリを選択します。

3. 関連するすべてのアプリ構成が設定されていることを確認します。たとえば、次のような操作を行う必要があります。

   - 右側のペインの [**Settings**] タブでアプリの値を変更して、アプリ固有の設定を定義します。

   - 「アプリのデータソースの定義」(71ページ) の説明にしたがって、アプリのデータソースを設定します。

4. アプリが [Apps] タブで選択されていることを確認します。次に、右側のペインで [**Enable**] をクリックします。

ユーザーの既定のカタログからアプリを削除には、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールが開かれていることを確認します。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ) を参照してください。

2. 次のいずれかの操作を実行します。

- すべてのエンドユーザーに対してアプリとの関連付けを同時に無効にします。
  i. 管理者コンソールの [Apps] タブで、アプリを選択します。
  ii. ウィンドウの右側で、[**Disable**] をクリックします。これで、アプリがカタログおよびHP Anywhereクライアントの [My Apps] ページから削除されます。
- 任意の、またはすべてのLDAP承認グループとの関連付けを削除します。
  i. 管理者コンソールの [Apps] タブで、削除するアプリを選択します。
  ii. ウィンドウの右側で、[Associated Authorization Groups] タブを選択します。
  iii. マウスを承認グループの上に置き、グループ名の横にある **X** をクリックします。LDAP承認グループとアプリとの関連付けがなくなります。これで、アプリがカタログおよびHP Anywhereクライアントの [My Apps] ページから削除されます。

注： アプリを無効にすると、エンドユーザーがそのアプリを使えなくなります。ただし、管理者コンソールの [**インストール済みアプリ**] の一覧にはアプリが表示され、引き続きアクセスできます。たとえば、このアプリのテストや再有効化が行えます。

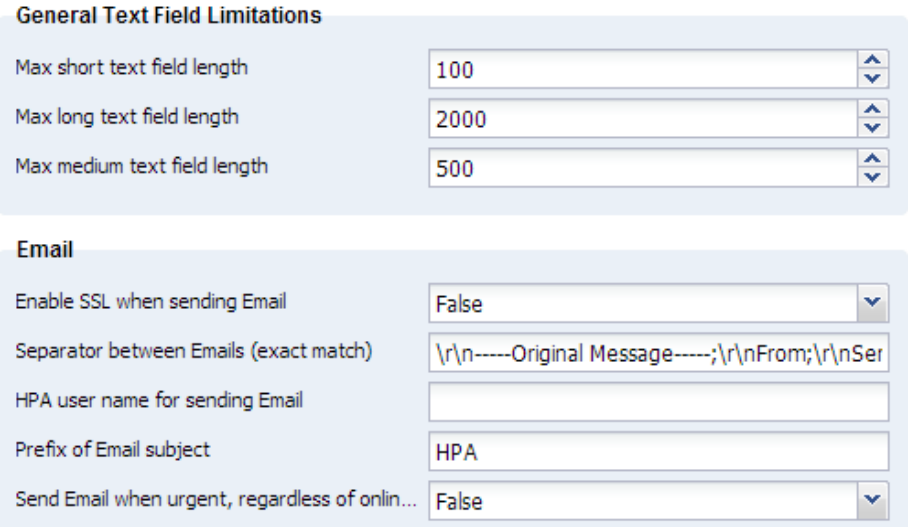
グローバル設定とアプリ固有の設定の定義

アプリをエンドユーザーに有効にする前に、必要なすべての設定が定義されていることを確認する必要があります。これは管理者コンソールの [Settings] 領域で行います。ここでは、次の項目を表示および定義できます。

- **General Settings:**システム全体に影響を与えるHP Anywhereのグローバル設定。
- **<アプリ>**:各アプリには、アプリの開発者によって作成された独自のシステム設定があります。

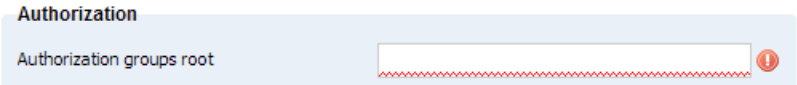
設定項目は、いくつかのグループ領域にまとめられています。

次の画面は、HP Anywhereの [**General Settings**] のいくつかのパラメーターの例を示しています。



各パラメーターには、パラメーターの説明、およびこのパラメーターへの変更が有効になる時期を含むツールヒントが表示されます。

必須パラメーターは赤色で表示されます。例:



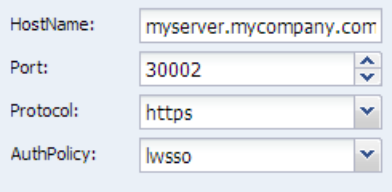
パラメーターの値を更新するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールが開かれていることを確認します。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。
2. 関連するフィールドに移動し、値を入力するか、ドロップダウンリストから値を選択します。
3. [**Save**] をクリックします。

アプリのデータソースの定義

アプリでは、頻繁にサーバーにアクセスして、データを取得およびアップロードする必要があります。アプリのデータソースとしては、1つまたは複数のサーバーを定義できます。

データソースとしては、ホスト名、ポート、プロトコル、認証ポリシーなどの情報を含めることができます。1つのデータソースインスタンスによって、1つの情報コンテンツが定義されます。例:



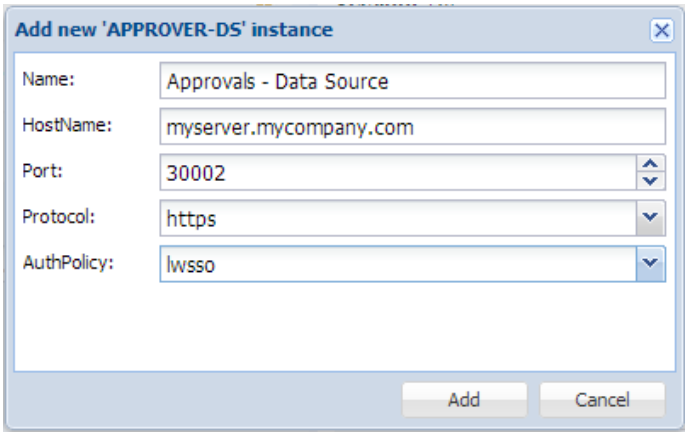
開発者は、アプリの作成時にデータソース要件を定義します。

データソースインスタンスは追加、削除、編集できます。データソースインスタンスを変更すると、このデータソースインスタンスを使用するすべてのアプリは自動的に新しい情報で更新されます。

注: アプリにデータソースが定義されていないと、そのアプリ名の横に黄色の感嘆符 (!) が表示されます。

新しいデータソースを追加するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールが開かれていることを確認します。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。
2. 管理者コンソールで、次のいずれかの操作を実行します。
   - [Data Sources] タブで、アプリを選択します。次に、右側のペインで [**Add Instance**] ボタンをクリックします。
   - [Apps] ペインで、アプリを選択します。次に、右側のペインで [**Data Source Configuration**] タブを選択し、[**Add Instance**] ボタンをクリックします。
3. ダイアログボックスが開いたら、パラメーターの値を次のように入力します。



4. [**Add**] をクリックします。インスタンスが [Data Source Configuration] タブに表示され、アプリで使用できるようになります。

アクティビティの表示設定

アクティビティの表示設定は、アクティビティを組織内のすべてのユーザーに表示するのか、実際のアクティビティの参加者にのみ表示するのかを指定するプライバシー設定です。アクティビティは以下に設定できます。

Private: 現在アクティビティに組み込まれている参加者のみが、アクティビティを表示できます。private (非公開) アクティビティの検索結果は、アクティビティの参加者のみに表示されます。

Public: 任意のユーザーが、public (公開) として定義されているアクティビティを検索および表示できます。.

アクティビティのグローバルな表示設定は、管理者コンソールを使用して行います。既定の表示設定、およびユーザーがアクティビティの表示設定を変更できるかどうかを指定できます。

すべてのアクティビティの既定の表示設定を設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ) を参照してください。
2. 管理者コンソールの [Settings] タブで、[**General Settings**] (左側のペイン) を選択します。
3. 右側のペインで、[Activities] グループ領域に移動し、以下のフィールドを設定します。

フィールド	説明
非公開アクティビティのみを許可	エンドユーザーがアクティビティを公開として定義できるかどうかを指定します。 ■ **True**: ○ エンドユーザーが作成するすべてのアクティビティは非公開であり、アクティビティの参加者のみがアクセスできます。 ○ エンドユーザーは、非公開アクティビティを公開に変更できません。 ■ **False**: (既定) エンドユーザーはアクティビティを [**public**] または [**private**] に設定できます。

フィールド	説明
Default created activity visibility	新しいすべてのアクティビティの既定値。 ■ **PRIVATE**: ○ 新しいすべてのアクティビティが非公開に設定されます。 ○ [**Allow private activities only**] が [**False**] に設定されている場合、必要に応じてユーザーはアクティビティを公開に設定できます。 ■ **PUBLIC**: (既定) ○ 新しいすべてのアクティビティが公開に設定されます。 ○ [**Allow private activities only**] (前述) は、[**False**] に設定する必要があります。 ○ 必要に応じて、ユーザーはアクティビティを非公開に設定できます。

オフラインサポートの有効化

HP Anywhereでは、モバイルデバイス (タブレットおよびスマートフォン) がインターネットに接続されていない状態で、HP Anywhereへのログオンとアプリの使用をユーザーに許可するかどうかを決めることができます。(インターネットに接続されていない状態では、オフラインサポートが利用可能なアプリのみ使用できます。どのアプリでオフラインサポートが利用可能かどうか、またはオフラインサポートが利用可能なアプリがあるかどうかについては、アプリの開発者または関連部門に問い合わせてください。)

既定では、オフラインサポートは有効になっていません。

オフラインサポートを有効にした場合は、HP Anywhereへのログオン時にユーザー名とパスワードと置き換えるPINをユーザーが設定する必要があります。このPINは、モバイルデバイス上のユーザー設定で指定します。PINの定義が必要なことをユーザーに周知させる目的で、HP Anywhereへの初回ログオン時以降数回にわたって情報メッセージが表示されます。

オフラインサポートを有効にしない場合は、ユーザーは、インターネットに接続されていない状態でモバイルデバイスからHP Anywhereにログオンできません。また、HP Anywhereにログオンしている状態でインターネット接続が失われた場合、ユーザーがインターネット接続を必要とするアクション (ページ間の移動やタイムラインへの投稿など) を行うと、インターネットに接続されていないことを伝えるメッセージがデバイス上に表示されます。

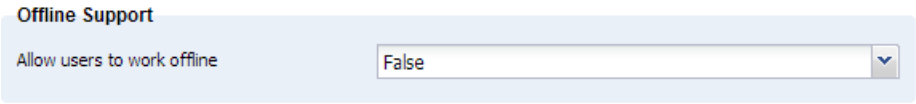
オフラインサポートの有効/無効を切り替えるには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。

2. **[一般設定] ペイン > [オフラインサポート] 領域**で次の操作を行います。

   - [**ユーザーがオフラインで作業できるようにする**] を [**True**] に設定してオフラインサポートを有効にします。

   - [**ユーザーがオフラインで作業できるようにする**] を [**False**] に設定してオフラインサポートを無効にします。



3. [**保存**] をクリックして変更内容を保存します。

HP Anywhereからの電子メールの送信

HP Anywhereでは、あるユーザーがHP Anywhereクライアントに未接続で、他のユーザーがそのユーザーをアクティビティに参加するように招待した場合などに、電子メールを送信できます。

既定の電子メールの設定は、管理者コンソールから行います。

HP Anywhereが電子メールを送信できるようにするには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。
2. [**Settings**] タブ > [**General Settings**] ペインで、さまざまなフィールドに移動し、必要に応じて値を設定します。

電子メールの必須設定

- **カテゴリ: パブリッシュチャネル**

フィールド	説明
電子メールをパブリッシュ	**電子メール通知を許可するかどうかを指定します。** **可能な値: True、False** **既定: False**

- **カテゴリ: 電子メール**

フィールド	説明
電子メール送信ホスト	SMTP電子メールサーバーのURL。 既定のポートを使用するか、次のようにポートを指定できます。 <サーバー>:<ポート>

フィールド	説明
電子メール送信時にSSLを有効にする	SMTPSで送信するか、またはSMTPで送信するかを指定します。SMTPSの場合、サーバーの証明書が必要になります。 HP Anywhereをインストールする場合、インストールで自動的にサーバーの証明書が生成されます。 証明書を手動で生成する必要がある場合は、JMX-Consoleに移動します ([**Host/diamond/jmx-console**] > [**diamond**] > [**CertificateJMX service**] > [**fetching certificate from trusted server**])。HP Anywhereのすべてのノードを再起動して、証明書を利用可能にしてください。(再起動が必要)。 **可能な値:** ■ True: SMTPSで電子メールを送信 ■ False: SMTPで電子メールを送信 **既定:** False
電子メール送信に使用するHP Anywhereユーザー名	電子メールの送信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザー名。 **既定:** N/A **例:** <サーバー>@<company.com>
電子メール送信に使用するHP Anywhereユーザーパスワード	電子メールの送信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザーパスワード。 **既定:** N/A
一般的な名前から電子メールを送信	電子メールのユーザーIDを指定します。 **可能な値:** ■ True: 電子メールは、一般的な (仮の) 電子メールアドレスから送信されます。 ■ False: 電子メールは、メッセージを投稿したユーザーの電子メールから送信されます。電子メールサーバーでサポートされている場合にのみ、適用可能です。 **既定:** False

フィールド	説明
電子メール受信ホスト	受信電子メールサーバーのURL。既定のポートを使用するか、次のようにポートを指定できます。 <サーバー>:<ポート>
電子メール受信時にSSLを有効にする	POP3S/IMAPSで受信するか、またはPOP3/IMAPで受信するかを指定します。POP3S/IMAPSの場合、サーバーの証明書が必要になります。 HP Anywhereをインストールする場合、インストールで自動的にサーバーの証明書が生成されます。 証明書を手動で生成する必要がある場合は、JMX-Consoleに移動します ([**Host/diamond/jmx-console**] > [**diamond**] > [**CertificateJMX service**] > [**fetching certificate from trusted server**])。HP Anywhereのすべてのノードを再起動して、証明書を利用可能にしてください。(再起動が必要)。 **可能な値:** ■ **True**: POP3S/IMAPS経由で電子メールを受信 ■ **False**: POP3/IMAP経由で電子メールを受信 **既定:** False
電子メール受信に使用するHP Anywhereユーザー名	電子メールへの返信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのユーザー名。 **既定:** N/A
電子メール受信に使用するHP Anywhereユーザーパスワード	電子メールへの返信に使用されるHP Anywhere電子メールアカウントのパスワード。 **既定:** N/A

電子メールのオプション設定

- **カテゴリ: 電子メール**

フィールド	説明
電子メール件名のプレフィックス	電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** HPA **例:** **差出人:** myserver@mycompany.com **日付:** 2013/9/15 (木) 12:57 PM **宛先:** Lee.Johnson@mycompany.com **件名: HPA:** 重要なアクティビティ
参加者の追加に失敗した場合の電子メール件名のプレフィックス	電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** Can't add participants-
アクティビティIDが見つからない場合の電子メール件名	電子メールへの返信に関連します。HP Anywhereが着信電子メールをアクティビティと照合できない場合にのみ使用されます。 **既定:** RE:メッセージ配信上の問題
一時停止/再開の電子メール件名のプレフィックス	一時停止中のアクティビティがタイムアウトした場合に、電子メールの件名行に含めるプレフィックス (アクティビティのタイトル)。 **既定:** HPA:Reminder-
電子メールのCCによる参加者の追加を許可	HP Anywhereが返信のCCにある電子メールアドレスを、参加者としてアクティビティに追加する必要があるかどうかを指定します。 **既定:** False
削除する電子メール署名形式	電子メールを送信する前に、返信から削除する会社の電子メール署名の形式を指定します。 **既定:** ${email};${firstName} ${lastName}
電子メール送信までの最大タイムアウト (分)	最後の電子メールが送信されてから、別の電子メールがオフライン参加者に送信されるまでの時間 (分)。 **既定:** 20

- **カテゴリ: テナント電子メール**

フィールド	説明
電子メール送信用の外部ホワイトリスト	電子メールを送信するための承認済みドメインの一覧。 セミコロン (;) を使用してドメインを区切ります (例: hp.com;google.com)。 **既定:** N/A
外部への電子メール送信	電子メールを外部ユーザー (組織以外の電子メールアドレス、John.Doe@gmail.comなど) に送信するかどうかを指定します。 **可能な値:** True、False **既定:** True

電子メールロゴの構成

通知用の電子メールヘッダーに含まれている既定のロゴを変更することができます。

既定のロゴを変更するには、次の手順を実行します。

<HP Anywhereインストールフォルダー>\conf\email\logotop.jpgを目的のロゴ (同じ名前を持つJPG形式の**logotop.jpg**を使用) で置き換えます。

電子メール形式のカスタマイズ

HP Anywhereが送信する電子メールの見た目と操作感は、HP Anywhereの電子メールテンプレートを変更してカスタマイズできます。

次の電子メールテンプレートは、**<HP Anywhereインストールフォルダー>\conf\email**に格納されています。

- **Template.html**: 参加者に送信するアクティビティ概要の電子メール。
- **replyTemplate.html**: 投稿に対して電子メールを返信しても返信内容を投稿できないユーザーに送信するシステム応答の電子メール。
- **CantAddTemplate.html**: アクティビティへの参加者の追加を電子メールで行えなかったユーザーに送信するシステム応答の電子メール。

注: カスタマイズした電子メールテンプレートのバックアップと復元をHP Anywhereサーバーのアップグレード時に行う方法の詳細については、『HP Anywhereインストール、構成、およびアップグレードガイド』のアップグレードの項を参照してください。

ロードバランサーとリバースプロキシの構成

HP Anywhereは、Stickyセッションを使用するように構成されているロードバランサーとのみ統合されます。

> **注:** ロードバランサーを使用する場合は、管理者コンソール > [一般設定] ペイン ([アプリ] の下) の [**アプリの共通Webコンテキスト**] フィールドに値を指定する必要があります。詳細については、「一般設定」(18ページ) を参照してください。

リバースプロキシの設定

リバースプロキシ経由でHP Anywhereにアクセスするには、次のURLを開く必要があります (特に記載がある場合を除きます)。

- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/onebox
- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/diamond
- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/bsf
  (デスクトップモードでは必須)
- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/HPALogin
- http(s)://ロードバランサーのサーバー名:<ポート>/<共通Webコンテキスト>
  (管理者コンソール > [設定] > [一般設定] ペインで [**アプリの共通Webコンテキスト**] の値を指定します)
- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/WebShell
  (オプション)
- http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/admin
  (リバースプロキシのURL経由で管理者コンソールにアクセスする場合にのみ関連します)

「動作中」インジケーター

URL (ステータスページ) を構成して、ロードバランサーの基本的で限定された「動作中」表示を行うようにできます。

http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/status.jsp

> **注:** この構成はオプションで、サポートしているロードバランサーに対してのみ使用できます。

アプリケーションURLの変更 (HP Anywhere管理者コンソール経由)

アプリケーションURLは、ポストインストール時に自動的に構成されます。インストール手順の完了後に、ロードバランサーのURLに一致するように、URL設定を手動で調整する必要があることがあります。たとえば、高可用性環境で作業している場合です。

ロードバランサー用に別のURLを使用するように、HP Anywhereに指示するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。

2. [**Settings**] タブを選択します。

3. 左側のペインで、[**General Settings**] を選択します。

4. [Server] グループ領域に移動し、[**The external URL of HPA server**] の値をロードバランサーサーバーのURLに変更します。例:
   http(s)://<ロードバランサーのサーバー名>:<ポート>/onebox

AJPプロトコル用のjvmRoute構成の例

ロードバランサーがAJPプロトコルを使用している場合、**workers.properties**ファイルで使用されるワーカー名に一致するjvmRouteが設定されていることを確認する必要があります。

注: jvmRoute名では、大文字と小文字が区別されます。

たとえば、ロードバランサーで次の行を定義したとします。

workers.propertiesファイル

```
worker.<worker_A>.host=<node_A>
worker.<worker_B>.host=<node_B>
```

各ノード (HP Anywhereサーバー側) のserver.xmlファイルで次のように定義する必要があります。

<node_A> 内のserver.xml:

```
<Engine defaultHost="localhost" jvmRoute="node_A">
[...]
</Engine>
<Connector port="8009" protocol="AJP/1.3" redirectPort="8443" />
```

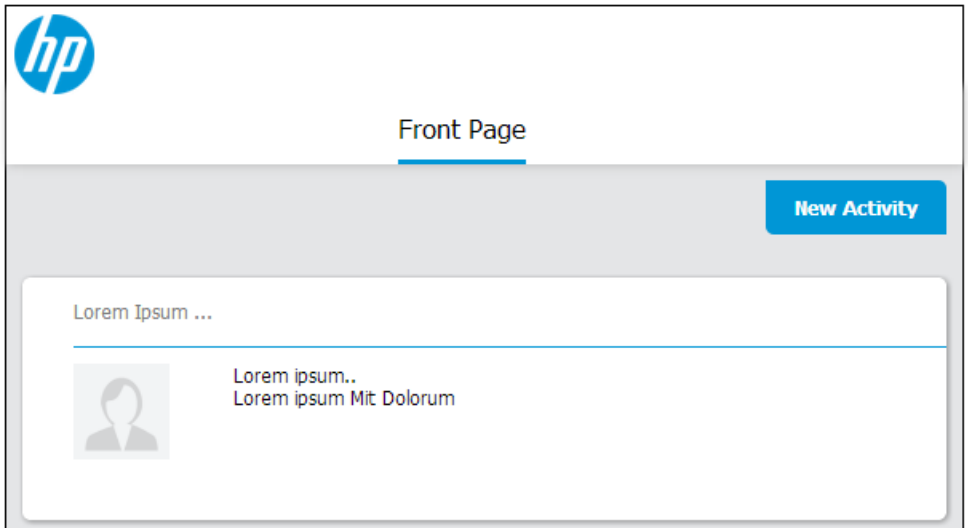
<node_B> 内のserver.xml:

```
<Engine defaultHost="localhost" jvmRoute="node_B">
[...]
</Engine>
<Connector port="8009" protocol="AJP/1.3" redirectPort="8443" />
```

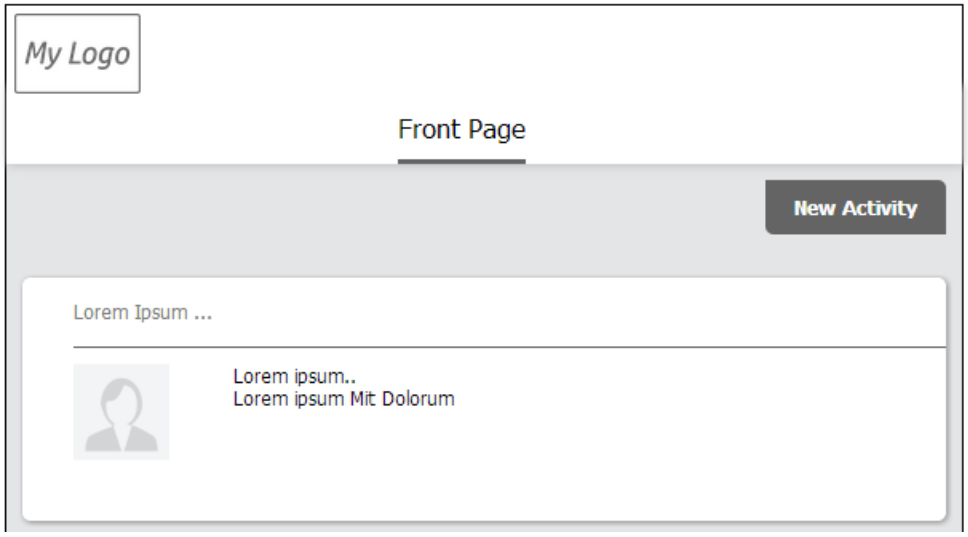
HP Anywhereユーザーインターフェイスのカスタマイズ

HP Anywhereの見た目と操作感は、会社のブランドアイデンティティと製品セットに合わせてカスタマイズできます。独自のロゴ、ブランド名、およびテーマカラーを適用できます。(また、既定のログインページと置き換える独自のログインページも設計できます。詳細については、「独自のログイン画面の作成」(89ページ)を参照してください。)

たとえば、次のページを



次のように変更できます。



注：上の例には、ブランド名は表示されていません。

HP Anywhereユーザーインターフェイスをカスタマイズするには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。
2. [**Brand Settings**] タブで、さまざまなフィールドに移動し、必要に応じて値を設定します。
3. ページ下部のプレビューで、変更したロゴとテーマカラーを適宜確認します。

   注: アプリケーション名 はプレビューには表示されません。

4. 次のいずれかの操作を実行します。
   - [**保存**] をクリックして変更内容を保存します。
   - [**Reset**] をクリックして工場出荷時の設定を復元します。
   - [**キャンセル**] をクリックして前回保存した設定を復元します。

ブランド設定

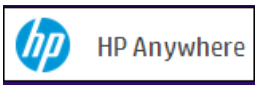
本項では、管理者コンソールの [Brand Settings] ペインのフィールドについて説明します。

管理者コンソールを開く方法の詳細については、「管理者コンソールへのログインおよびログアウト」(15ページ)を参照してください。

ブランド設定

フィールド	説明
Logo (.png)	ユーザーデバイス上でHP Anywhereの左上隅に表示される既定のHPロゴと置き換えるロゴ。 ロゴ要件： • **ファイルタイプ:** .png • **背景：** 透明 • **最大高さ:** 57ピクセル • **最大幅：** 180ピクセル **注：** 高さまたは幅が最大ピクセル数を超えた場合は、割り当てられたスペースに収まるように画像サイズが均等に変更されます。 **必須：** いいえ **可能な値：** アップロードするロゴ画像ファイルのパス **既定：** なし **注：** 別の画像ファイルを選択するまでは、HPのロゴがプレビューに表示されます。
Theme Color (Hex)	#000000 (黒) など、16進数のカラーコード。テーマカラーを指定すると、行の既定カラーが置き換わり、ユーザーデバイス上でHP Anywhereのボタンが使用できるようになります。 **必須：** はい **可能な値：** 16進数の任意のカラーコード値 **既定：** #0096d6

ブランド設定 (続き)

フィールド	説明
アプリケーション名	ユーザーデバイス上でHP Anywhereのロゴの右に表示するブランド/アプリケーション/タグ行の名前。たとえば次のような操作を行います。  **アプリケーション名を定義するには、次の手順を実行します。** 1. [**設定**] タブ > [**一般設定**] ペインに移動します。 2. [**既定のアプリケーション名**] フィールドの値を定義します。 **アプリケーション名を空欄にするには、次の手順を実行します。** 1. [**設定**] タブ > [**一般設定**] ペインに移動します。 2. [**既定のアプリケーション名**] フィールドにスペース文字を入力します。(フィールドに何も入力しないと、既定のアプリケーション名のHP Anywhereが表示されます。) **注:** • デスクトップおよびタブレットでのみ可能です。(スマートフォンにはアプリケーション名は表示されません。) • アプリケーション名はプレビューには表示されません。 **必須:** はい **可能な値:** 文字列 **既定:** HP Anywhere

独自のログイン画面の作成

既定では、ユーザーはHP Anywhereログインページ経由でHP Anywhereにログオンします。このログイン画面は、管理者コンソールの設定を変更することで、独自の画面に置き換えることができます。

独自のログインページを使用するには、次の手順を実行します。

1. 管理者コンソールを開きます。詳細については、「管理者コンソールの概要」(15ページ)を参照してください。
2. [設定] タブで、[**サーバー**] セクションに移動して次の値を設定します。
   - **「アプリケーションログインページ」** (詳細については、「アプリケーションログインページ」(35ページ)を参照してください。)
   - **「アプリケーションログインページの相対パス」** (詳細については、「アプリケーションログインページの相対パス」(35ページ)を参照してください。)
3. 次のいずれかの操作を実行します。
   - [**保存**] をクリックして変更内容を保存します。
   - [**Reset**] をクリックして工場出荷時の設定を復元します。
   - [**キャンセル**] をクリックして前回保存した設定を復元します。

ユーザーとデバイスの管理 - ユーザー/デバイス接続の制限 (ブラック/ホワイトリスト)

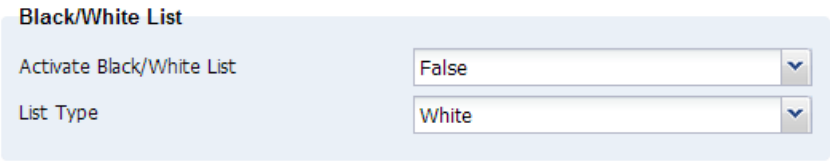
特定のユーザーやデバイスによるHP Anywhereへのアクセスの許可または防止は、次のリストを作成して実装することで行えます。

- **ホワイトリスト**では、HP Anywhereへの接続を特定のユーザーやデバイスにのみ許可できます。
- **ブラックリスト**では、特定のユーザーやデバイスによるHP Anywhereへの接続を防止できます。

既定では、この制限機能は無効になっています。この機能を有効にした場合は、アクセス許可のないユーザーやデバイスには、HP Anywhereへのアクセス時にエラーメッセージが表示されます。

ブラックリストまたはホワイトリストの使用前提条件：

1. HP Anywhereデータベーススキーマに接続し、データベースタイプに応じて次のいずれかのSQL作成コマンドを実行します。
   - **Oracle:** <HP Anywhereインストールフォルダー>\confwizard\conf\scripts\database\oracle\oracle_create_provisioning_entities.sql
   - **MSSQL:** <HP Anywhereインストールフォルダー>\confwizard\conf\scripts\database\mssql\ mssql_create_provisioning_entities.sql
2. **ブラック/ホワイトリスト**設定を管理者コンソールで設定します。
   a. HP Anywhereの管理者コンソール (**http(s)://<HP Anywhereサーバーの URL>:<ポート>/admin**) にログインします。
   b. [**設定**] タブをクリックします。
   c. **ブラック/ホワイトリスト**セクションまでスクロールし、以下を設定します。
      - [**ブラック/ホワイトリストをアクティブにする**] を [**True**] に設定します。
      - [**リストタイプ**] を [**ブラック**] または [**ホワイト**] に設定します。



   d. 変更内容を保存します。

   ブラックリストとホワイトリストの操作の詳細については、http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals で検索してください。
3. 次に示すプロビジョンリストAPIを使用して制限を適用します。

プロビジョンリスト API

ユーザーやデバイスの制限は、次のいずれかのリストタイプを使用して適用できます。

- **ホワイトリスト:** HP Anywhereとアプリへのアクセスを特定のユーザーやデバイスにのみ許可できます。このリストに含まれていないユーザーやデバイスはHP Anywhereにアクセスできません。
- **ブラックリスト:** 特定のユーザーやデバイスによるHP Anywhereへの接続を防止できます。組織内の他のHP Anywhereユーザーやデバイスは、すべてHP Anywhereにアクセスできます。

リスト内の各エントリは以下に適用できます。

- ユーザーの例: `{"userId":"user1"}` または `{"userId":"user1","deviceId":null}`
- デバイスの例: `{"deviceId":"device2"}` または `{"userId":null,"deviceId":"device2"}`
- 特定のユーザーに対して特定のデバイスを制限する2つの組み合わせの例: `{"userId":"user1","deviceId":"device2"}`

エントリは必要な数だけリストに追加できます。

URL

`http(s)://<ホスト>:<ポート>/ diamond/rest/api/V2/provision-list`

注釈

リストタイプは、**HP Anywhereの管理者コンソール > [設定] タブ > [ブラック/ホワイトリスト]** セクション **> [リストタイプ]** で設定します。

> **注:** [**リストタイプ**] はリスト内のエントリには影響を与えません。制限タイプにのみ影響を与えます。

HTTPメソッド

GET

説明	ブラックリストまたはホワイトリストからエントリを取得します。 **注:** GETの使用時は次のことが行えます。-- クエリパラメーターを使用してユーザーIDやデバイスIDを指定し、関連エントリを取得する。-- クエリ文字列を空欄にし、リスト内のすべてのエントリを取得する。

パラメーター	**userId**	HP Anywhere固有のログイン名。
	deviceId	HP Anywhereの管理者コンソール > [User Profiles] タブ > [Associated Devices] タブ > [P/N] の定義に従ってユーザーと関連付けるデバイス。
例:	**URL**	http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/rest/api/V2/provision-list?userId=user1 http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/rest/api/V2/provision-list?userId=user1&deviceId=device1 **注:** この複合クエリの例では、「user1」と「device1」の両方を含むエントリが1つ返ります。
	ヘッダー	許可: application/json
	応答本文	{"entries": [{"userId":"user1","deviceId":"device1"}, {"userId":"user1","deviceId":"device2"}, {"userId":"user1","deviceId":"device3"}]} {"entries": [{"userId":"user1","deviceId":"device1"}]}

DELETE

説明	指定したエントリをブラックリストまたはホワイトリストから削除します。 **注意:** エントリーのリストは次の場合に削除されます。 --クエリパラメーターが追加されていない場合。 --クエリパラメーターのスペルが誤っている場合 (「deviceId」でなく「deviceID」の場合など)。 **注:** DELETEの使用時には次のことが行えます。 -- クエリパラメーターを使用してユーザーIDやデバイスIDを指定し、関連エントリを削除する。 -- クエリ文字列を空欄にし、リスト内のすべてのエントリを削除する。	
パラメーター	**userId**	HP Anywhere固有のログイン名。
	deviceId	HP Anywhereの管理者コンソール > [User Profiles] タブ > [Associated Devices] タブ > [P/N] の定義に従ってユーザーと関連付けるデバイス。

例:	**URL**	http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/rest/api/V2/provision-list?userId=user1
	ヘッダー	X-CSRF-HPMEAP: HPA
	ステータスコード	200 OK

PUT

説明	ブラックリストまたはホワイトリスト内の既存エントリを削除し、指定されたエントリのリストと置き換えます。 **注:** HP Anywhereでは、PUTまたはPOSTの実行前に、次のような競合がないことを検証します。 {"userId":"user1"}, /*Generic: このユーザーに関連付けられているすべてのデバイスに適用します。*/ {"userId":"user1","deviceId":"device2"} /*Specific: このデバイスの使用時に、このユーザーに制限を適用します。*/	
例:	**URL**	http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/rest/api/V2/provision-list
	ヘッダー	X-CSRF-HPMEAP: HPA コンテンツタイプ: application/json
	本文	{"entries":[{"userId":"user1","deviceId":"device1"}, {"userId":"user1", "deviceId":"device2"}, {"userId":"user1","deviceId":"device3"}]}
	ステータスコード	204 No Content

POST

説明	ブラックリストまたはホワイトリストにエントリを追加します。既存リストと追加されたリストにエントリの競合がない場合は、追加されたリストのエントリが優先されます。 たとえば、特定のユーザーについて2つのデバイスのエントリがあるとします。 {"userId":"user1","deviceId":"device1"}, {"userId":"user1","deviceId":"device2"} このユーザーの汎用エントリ(デバイスの指定なし)をリストに追加した場合、 {"userId":"user1"} ホワイトリスト内の既存エントリが追加されたエントリで上書きされ、そのユーザーのすべてのデバイスが許可されます。 同様に、1人のユーザーに対してのみ指定された汎用エントリがブラックリスト内にあり、そのユーザーのデバイスを含むエントリが追加されたリストに含まれる場合は、ブラックリストに以前登録されていたユーザーが、任意の登録デバイスを使用してHP Anywhereにアクセスできるようになります。	
例:	**URL**	http(s)://<ホスト>:<ポート>/diamond/rest/api/V2/provision-list
	ヘッダー	X-CSRF-HPMEAP: HPA コンテンツタイプ: application/json
	本文	{"entries": [{"userId":"user1","deviceId":"device1"}, {"userId":"user1","deviceId":"device2"}, {"userId":"user1","deviceId":"device3"}]}
	ステータスコード	204 No Content

Cassandra—バックアップおよび復元

Cassandraは、独自のバックアップユーティリティと復元プロセスを備えたピアツーピアのNoSQLデータベース管理システムです。サーバーノードは、複数のデータセンターとサイトに分散できます。データはこれらのノード間で複製されます。データの復元と復旧は、通常、データセットのすべての複製が失われた場合、または壊れたデータがデータベースに書き込まれた場合にのみ必要です。

サーバーノードのバックアップ時には、ノード全体のベーススナップショットの取得、または最終ベーススナップショット以降に加えられた変更を含む増分バックアップとベーススナップショットとの結合のいずれかを選択できます。

本セクションで使用するCassandraの用語：

Cassandra	リレーショナルデータベース相当
カラムファミリ	テーブル
キースペース	データベース
SSTable	データファイル

Cassandraのバックアップツール

Cassandraでは、オンライン操作が可能な場合は、いつでもキースペース内のデータのスナップショットを取得できます。このため、データのバックアップを常に行えます。これらのバックアップは、親のキースペース内に格納されているアクティブデータファイルへのハードリンクです（ファイルの実際のコピーではありません）。これにより、使用するディスク容量を最小限に抑えるとともに、プロセスの迅速な実行が可能です。

バックアップは、次のCassandraのデータディレクトリに通常は保存されます。
.../var/lib/cassandra/data/<キースペース名>/<カラムファミリ名>/snapshots/<オプションスナップショット名>このディレクトリには、データリンクが記載された***.db**ファイルが、スナップショットで取得されるたびに格納されます。

ノードのベーススナップショットを作成するには、次の手順を実行します。

1. 個々のノード上で、次のコマンドを入力して**nodetool**ユーティリティを実行します。
   `$ nodetool -h localhost -p 7199 snapshot appStore -t <スナップショット名>`
   ここで、<スナップショット名>はバックアップの管理を可能にするオプションパラメーター、7199はJMXポートです。

2. その他のノードについて上の操作を繰り返します。

スナップショットを削除するには、次の手順を実行します。

1. ノード上で、次のコマンドを入力して**nodetool**ユーティリティを実行します。
   `$ nodetool -h localhost -p 7199 clearsnapshot –t <スナップショット名>`
   ここで、7199はJMXポートです。

2. その他の個々のノードについて上の操作を繰り返します。

3. (オプション) スナップショットを圧縮し、外部ストレージの場所に移動して保存します。

> **注：** Cassandraを開いている場合は、Windowsの問題により、スナップショットは削除できません。詳細については、以下を参照してください。https://issues.apache.org/jira/browse/CASSANDRA-4050?page=com.atlassian.jira.plugin.system.issuetabpanels:all-tabpanel

増分バックアップ

増分バックアップを有効にした場合は、フラッシュした個々のSSTableへのハードリンクが、Cassandraによってキースペースデータディレクトリの下の**backups**ディレクトリに作成されます。これにより、キースペース全体のスナップショットを取得しなくても、増分バックアップを外部の場所に保存できます。

増分バックアップを有効にするには、次の手順を実行します。

1. **cassandra.yaml**をテキストエディターで開きます。

2. **incremental_backups**の値を**true**に変更します。

> **注：** Cassandraでは、増分バックアップは削除されません。したがって、新規スナップショットの取得時に増分バックアップを消去する自動プロセスを設定する必要があります。

Cassandraの復旧プロセス

Cassandraのキースペース復旧時には、スナップショットの取得時に存在したすべてのキースペースSSTableファイルを復元します。この操作は、Cassandraクラスター内の個々のサーバーノードに対して行う必要があります。

1つのノードを復元するには、次の手順を実行します。

1. Cassandraがシャットダウンされていることを確認します。

2. **commitlog**ディレクトリ内のすべてのファイル (.../var/lib/cassandra/commitlogなど) を削除します。

3. **<データディレクトリの場所>/<キースペース名>/<カラムファミリ名>**ディレクトリ内にある***.db**ファイルをすべて削除します。ただし、**/snapshots**および**/backups**サブディレクトリは削除しないでください。

4. 復旧に使用するベーススナップショットを、ストレージディレクトリからアクティブキースペースの**$DATA_DIRECTORY/<キースペース>/**にコピーします。

5. 復旧に使用する増分スナップショットを、ストレージディレクトリからアクティブキースペースの**$DATA_DIRECTORY/<キースペース>/**にコピーします。

6. Cassandraを起動します。(この時点では、I/Oアクティビティが一時的にピークとなるため、CPUリソースの使用率が急増します。)

Java™
COMPATIBLE